

第1章 滞留するフリーターの働きかた

遠藤康裕・大岸正樹・西村貴之・渡辺大輔

1. はじめに

2003年におこなった2回目調査時にフリーターをしていた者たちは、「やりたいこと」を語りながらも、家庭の経済的理由から進学を断念し、その資金稼ぎを目的としてアルバイトをしていたり、一家の「稼ぎ手」として低収入ながらも家計を支えていた。また進学や就職のあと、そこから離脱した場合、フリーターが彼ら彼女らの受け皿となっていた¹。

それから2年、彼ら彼女らの移行はより複雑なものとなっている。前回調査時にフリーターだった12名のうち、今回インタビューに応じてくれたのは8名（宮本哲史、相良健、竹内奈央、庄山真紀、吉川綾、西澤奈穂子、浜野美帆、田辺薫）で、このうち正規雇用で就職したのは相良の1名だけであった（詳しくは第2章）。また、新たにフリーターとなった者は、高卒後すぐに正規雇用就職したものの約10ヶ月後に離職に至った下川彩乃、専門学校を卒業した岡本祥子、短大を卒業した若林理恵の3名である。本章では相良を除く以上の10名に、相良と交際をしている岸田さやかを加えた11名をあつかう。

新たにフリーターとなった下川は、高卒後すぐに正社員で就職したが、数度の店舗異動、店の経営の先行きのなさ、超過勤務（14時間労働）、人間関係のストレスを理由に離職した。

その他の2名はいずれも進学先を卒業したのち、正規雇用には就いていない。岡本は芸能系専門学校（俳優専攻）を卒業し、プロダクションに入りながらも、アルバイトをして生活費を稼いでいる。若林は入学前に描いていた短大像と現実の学校生活のギャップに悩みながらも卒業するが、家庭の経済的状況と母親との確執により四年制大学への編入や他大学への入学もできず、フリーターとなる。

今回、新たにフリーターとなった3名をみても、これまで私たちがみてきたフリーターとなっていた若者と同様、「ニート」や「フリーター」が語られる際に出されがちな「働く意欲がない」「やる気のない」「甘えてる」若者像とは重ならない。また、フリーターが正規雇用就職から挫折した者の受け皿ともなっていることがわかる。

本章2節以下で詳述するとおり、今回私たちの捉えて

いる若者たちは非正規雇用をずっと継続しているわけではない。彼ら彼女らが語るフリーターとしての経験の内実は、就業、失業、無業をくり返すものであった。彼ら彼女らはインタビューの際、その時期のポジションからみずからのことを「ニート」「フリーター」と表現していたり、それまでの経験と現在のポジションが密接に関連するものとして「プチニート」「半分ニート」という言葉で表現していたりなど、フリーターそれぞれの実態もさまざまであった。よって本章では、「フリーター」をある一時点で非正規雇用として働いているか/いないかという定点的な捉えかたではなく、就業、失業、無業をくり返す動的なものとして捉え、インタビュー時に無業だった者も「フリーター」としてあつかっている。

では、彼ら彼女らの「フリーター」という生きかたの実際はどのようなものなのだろうか。本章は四つの視点で分析、検討をおこなう。第一に、彼ら彼女らがフリーター生活をどのように渡ってきているのか、そのプロセスを追う。第二に、彼ら彼女らが語る離職理由とその背景にあるものについて、第三に、彼ら彼女らのフリーター生活と家族との関連、最後に、彼ら彼女らの働きかたを支えるネットワークについて。以上の視点から、急速に変容している現在の労働市場²のなかでの若者の移行過程において、「フリーター」という働きかたが「新たな働きかた」として位置づく可能性をもちうるのかどうか検討したい³。

2. 滞留するフリーター

1) フリーター11名の仕事の渡りかた

この11名のなかには、一度正規雇用で就職をしていたり、進学したりした経緯をもつ者もあり、フリーターである期間にばらつきがあるが、まずは彼ら彼女らの仕事の渡りかたをみてみたい（図1）。高校卒業後、または正社員から離脱してフリーターとなった者をみると、この3年間で多くの者が数種類の仕事を経験していることがわかる。多い者では二桁にせまる勢いであり、自分でも正確に語れないほど仕事を転々としていた時期があった者もいる（西澤、浜野、宮本）。また、仕事と仕事の合間に数ヶ月の失業・無業期間がありそれをくり返している者も少なくない。

一方、年単位で同じ職場で働いている者は、庄山（弁当屋、3年）、田辺（コンビニ、2年半）、岸田（ホームセンター、1年半）、そして高校から専門学校在学中も継続して働いていた岡本（コンビニ、3年以上）の4名だけである。ただし彼女らは一つの職場である程度長期

的に働きながらも、岸田以外の者はそれと掛け持ちして別の仕事を複数経験している。

このように仕事の渡りかたはこの3年間で大変複雑なものとなっているが、いずれにしても彼ら彼女らは失業・無業期間を挟みながらもフリーターを続けているのが現状である（前述のとおり、フリーターから正規雇用で就職した者は相良のみである）。

以下では、彼ら彼女らが個々にどのように複雑な仕事の渡りかたをしているのか、具体的に追っていく。

①短期間で職を転々とする「半分ニート」の浜野美帆（B高校出身）

浜野は卒業後に正社員で就職した美容室を退職（職場の人間関係のストレスや仕事内容により体調を崩す）したのち⁴、パチンコ店や倉庫整理、カラオケ店などのアルバイト・派遣の職を転々とした。いずれも店頭の貼り紙や雑誌などで探しており、カラオケ店は職場環境に「なんか馴染めない」ことから3週間で辞めた。派遣の仕事は「気分転換みたいな感じ」でやっていたが、倉庫整理は昼間に、カラオケ店は夜に勤務するなどアルバイトを掛け持ちして「こんときはがんばっていた」。

浜野は母子家庭で、母親が身体的理由によって仕事をできないため、収入の全額を家計に回していた。そのような状況のなか、彼女は仕事を転々としていたため、母親には「給料が途切れると困る」といわれていた。

2005年10月ごろから始めたテレフォンポインター（以下、「テレアポ」）のアルバイトは、インタビュー時まで約5ヶ月間続いている。彼女にとっては長い職歴である。しかし入社2ヶ月後ぐらいから、下記のような勤務形態の変更や同じアルバイト以外の人との関係におけるストレスを理由に、ずっと「辞めたい」といっていた。

テレアポがこんなに続いたのは（他のアルバイトとの）人間関係がよかったんですよ。楽しかったし。出勤がとても厳しくなって、入ったときの条件というのが、出勤が選べて、週3からOKというのが選べたんですよ。（中略）予定を変えるときには一週間前ぐらいにいつくれば変えるからっていわれて。でも今は一週間前にいつてもダメっていわれるんですよ。

「あとかく」（電話営業での受注のあとに確認をとる人）ってというのは、申し込みをしてくれたお客さんよりも立場が上なんです。うちらは下手に出てるんですけど、あとかくがいばってるのも違うと思って嫌だし、早く起きないといけなし、もう無理だって思って。

また研修時は時給1500円だったが、その後は実績で計算され1050円となったことも不満のひとつとなった。同時に正規社員なみに休みなく働くことにも疑問をもち、みずからのことを「いってみればただのバイト」「うちらはそこまでできない」として、正規と非正規での働きかたに線引きをしている。

ちょうどこのインタビュー時には、西澤さんの母親から隣県のお菓子屋のアルバイトを紹介され、「お店で作って、売って、体を動かせる」ことに魅力を感じ「やりたい」と引き受けていた。時給は850円とテレアポより下がるが、次のようにいう。

テレアポの時間と販売の時間だったら、同じ時間働いていてもずっと動いてるから違うと思うんですよ。基本的に動きたいし。

ここでは、友人の親からの紹介という強いつながりがあっただけではなく、仕事のしかたについてもこれまでの仕事と比較して好奇心を覚え、期待を抱いていることがわかる。

このように、正社員での仕事を辞めてから失業・無業期間をくり返し挟みつつ、いくつかのアルバイトを掛け持ちし転々としているみずからのことを、彼女は「半分ニート」「プチニート」と呼ぶ。

②仕事がなかなか決まらない下川彩乃（B高校出身）

下川は、高校卒業後すぐに正規雇用で就職した惣菜等調理販売会社に約10ヶ月間勤務した。しかし、数度の店舗異動、店の経営の先行きのなさ、超過勤務、人間関係のストレスから、退職希望日の1ヶ月前に辞職願を出したが、その10日後に辞めさせられた⁵。

離職後、会社のアドバイスのもと、失業手当を受給するためにハローワークに行き、仕事探しもするが、年齢制限のあるものや資格が必要なものが多く、「ハローワークはあてになりません」とここでの職探しをあきらめた。そのあいだに、以前から取りたいといっていた車の免許を取得する。費用はすべて自分で負担した。

その後2004年6月からの3ヶ月間はタウンワークや新聞の折り込みから宅配便やビル清掃、病院清掃などいくつかのアルバイトをみつめて面接を受けるが、すべて落ちてしまった。

失業手当の受給も切れる10月ごろ、竹内の誘いで俳優・声優養成所に入学するが、交通費や学費がまかなえず、2005年の9月ごろに行かなくなった。

そのあいだに、派遣会社での短期バイトを得ることが

できた。書類の袋詰め作業が主な仕事で、「長期でもいいよ」と登録されたが、3ヶ月働いたところで「急に打ち切れ」た。その後1ヶ月間仕事のない状態を経たあと、3日間の書籍整理の短期バイトをした。しかしその後は2ヶ月のあいだに靴下専門店と本屋のアルバイトに落ち、自信を失ってしまった。

へこみますよ。なんでいけないんだろうって。言葉づかいが悪かったのかなとか、それとも格好が悪かったのかなとか。それか顔？ ありますよ。(面接官が)男の人だと特にありますよ。面接いくとかならず顔みますよ。顔みて、足みて、全部みるんですよ。面接の時点ですぐわかるんですよ。「お電話しますね」と完璧アウト。その場で、「お願いしますね」といられないと。

靴下(の会社)も落とされた。あれはショックだったんだよ。落とされたあとにすぐに募集が出てたんだよ。なんのために落とされたんだよって。

彼女のアルバイト探しの条件は、仕事を初めから教えてくれること、時給800円ぐらい、家から遠からず近からず(車通勤も可、通勤時間が長いほうが「スイッチ」が切り替えやすい)と、それほど高望みはしていなかったにもかかわらず、何度も不採用となった。ただし、そのあいだには、自宅から離れたところにある弁当屋に受かったが、母親が家から職場が遠いことに反対し、辞退することになったということもあった。

母親は高校のときから「監視」が強く、日曜日にも友人と出かけられないほどだった。親(特に父親)は「いろんな仕事を変えることはいいことだ」といい、彼女が家にいても何もいわない。その裏には、翌年の父親の定年退職にあわせて、北関東にある故郷に家族で引っ越す計画があり、そこで「結婚して子どもを産めばいい」「農家の嫁にしたい」という女性にたいするジェンダー意識があるものと考えられる。しかし下川自身は、文句をいながらも専業主婦に縛られている母親をみて、結婚・専業主婦の道への憧れはもっていない。

現在、家事手伝いをして「親のすねをかじって」いる「ニート」とみずからを称するが、「これから仕事をしてすぐ家を出ます」「家にいるからダメなんだ。ヤバイ、私。仕事してないからかな、人と接してないからかな、私おかしい」と、家を出ること、そのために仕事を探すことに逼迫感を抱いている。

③狭いネットワークのなかに滞留する西澤菜穂子(B高校出身)

西澤は高卒後、父親が勤める大手事務用品会社の下請け会社に縁故で正規雇用就職するが、人間関係からくるストレスから体を壊し退職。庄山や浜野らライブ仲間との交流により精神的にも回復してから、交通量調査や登録制バイトなどを転々とした⁶。これらのアルバイトの数や期間は本人もうろ覚えでしかなかった。

その後、道ばたで声をかけられたホストに紹介され、上野のクラブで庄山とともに働く。時給4~5千円で、普通のアルバイトの1日分を1時間で稼げるため「味をしめてしまった」。しかし客のセクハラなどに苦痛を感じ、2ヶ月で辞める。次に浜野が働きはじめたパチンコ屋に行くが、自由シフトのはずが固定にされ、ライブに行けなくなり、また店員どうしの仲が悪かったうえ、浜野も辞めてしまったため、3ヶ月働いたところで離職した。パチンコ屋の時給は900~1000円と高く、月に15~16万円を稼いでいたが、クラブでの稼ぎの魅力をくつがえすものにはならなかった。彼女は「だからキャバクラ(クラブ)やる前にやればよかったものを」と後悔している。

退職後しばらく「自由人」となり、ライブで知り合ったキャバクラなどに精通した友人(女性)に貢いでもらうかたちでしばらくつるんでいた。親にも「いいかげんにしろ、働け」といわれ、庄山の「いいかげん働けよ、うちのお店来なよ」という誘いで新宿のキャバクラで働きはじめた。時給は最低3000円で「とりあえず時給もらっときゃいい」と指名を得る努力は特にせず2ヶ月間働くが店が潰れた。そこで知り合った庄山の友人(女性)が段取りを組み、水商売の店に入った。そこではこれまで以上に高額な収入を得ることができ、すべて遊び代や彼氏への貢ぎ代に使うなど「金銭感覚がおかしくなってくるほどであった。しかしこの店が潰れたため、この友人がみつめてきた東京都に隣接する地域で水商売をすることとなった。ここでもかなり高額な賃金がもらえたが、職場環境も劣悪で健康への不安もあり、うつ病にもなりかけ「泣きつづける日々」だった。給料は高額な医療費などにも使われていた。しかし、庄山が母親の事故でお金が必要だと知り、彼女をこの店に誘ったりもした。このあともこの友人と毎日卒業アルバムと保険証を年齢確認のために持ち歩き、キャバクラなど水商売の店を数店舗渡り歩いた。そこでの段取りもすべてその友人がとってくれた。入店当初は店側から客をつけてもらえるが、慣れてくるとそれがなくなり、客がつかないと収入も減る。よって、短期間で渡り歩くことで自分たちの「商品

価値」が下がるのを防ぐというアイデアもその友人からのものだった。

現在は東京都隣県都市のキャバクラで働く。ここは「大手だから安く、最低時給3000円。場所も遠く、客とのやりとりも嫌になり、「いつ辞めようかと思ってる」。また、「普通の仕事がしたくて。これじゃいけない、もう21歳だし。水商売ばかりだと気が狂いそうになってきて、親も働いていないと思ってるから、ここでいいかげんにして働いて」と水商売業界から足を洗うことも考えている。高校生のときにしていたマクドナルドでのアルバイト経験から「接客だよな」と発想し、昼間に地元漫画喫茶でもアルバイトとして働きはじめた。

④家計をえるために仕事を掛け持つ庄山真紀（B高校出身）

庄山は高卒後からの弁当屋でのアルバイトを継続しながら、キャバクラなどのアルバイトも掛け持ちした。弁当屋では月に最大20万円稼いでいたが、もともと「常に時給のいいバイトをしたい」と思っていたところ、上野のクラブを西澤とともに紹介された⁷。その後、西澤とライブ友だちとともにキャバクラを渡り、水商売の店へと至った。その店が潰れたあと、キャバクラなどに精通している友人と西澤に、「ホントに稼げるからおまえ来ないか」と別の店に誘われた。そこでは「リスクは大いけど確実に稼げた」。そこは職場環境も労働条件も悪かったが、「貯金しなきゃいけない」ということもあり「すごい辛かったんですけど、でもそれだけもらえたから」約半年弱のあいだ働きつづけた。この店が潰れそうになるのをきっかけに、西澤と話し合い、親にこの仕事を知られる危険性があることや、「普通の仕事に戻ることが、身体も覚えていたし大丈夫だった」ことから、辞めることにした。この仕事は「楽っちゃ楽」といいながらも、「これ1本にするのは嫌。やっぱり働いていたい」「やっぱり普通に働いてるほうがキツイけど、仕事をしてるっていう感じがある」など、弁当屋などでの「労働」とは一線を画していた。

庄山は母子家庭で、母親は水商売を続けている。庄山が水商売をしていたころはかなり多額を家計に入れていたが、その店を辞めたあと、母親が交通事故に遭い、その治療費、入院費などの負担で、これまで貯めた貯金がなくなってしまった。そのため西澤に誘われ一時期水商売に戻っていた。

このころから、「本格的に働かなくちゃダメだな」と思いはじめ、これまでずっと続けてきた弁当屋と掛け持ちで時給1000円のカラオケ屋でもアルバイトを始め

た。これまでの給料よりもかなり減るが「生きていける」と捉えていた。しかし身なりに厳しい職場環境が合わず、今すぐ辞めたいと思っている。これまで続けてきた弁当屋は、人事異動で新しく来たマネージャーとそりが合わず、そのストレスにより「死ぬんじゃないか」と思うほどに体調を崩すまでに至り（3節）、結局約3年間続けたこのアルバイトも辞める結果となった。

⑤何もせず自己嫌悪におちいる吉川綾（B高校出身）

吉川は専門学校を半年で退学後、スーパーの貼り紙で求人を見つけた花屋で働きはじめた。約3ヶ月勤めたが、勤め先が店舗から工場勤務になったことをきっかけに辞めた⁸。1ヶ月間無職でいたのち、介護の有限会社を経営する父親（離婚して別居）に「なんか仕事ないんだけど」と相談したところ、「じゃあうちにおいで」と「必然的に」父親の会社でコピーや書留などの簡易な作業をおこなう事務員として働くこととなった。父親とともに会社を興した人がサポートをしてくれたが、3ヶ月間働いたところで「だいたい働いたから」と退職した。

その後は「何か違う仕事しようかなと思ったけど、でも結局ずっとなんもやんなかった」。3ヶ月間「プー生活」を送ったころ「そろそろヤバイな」と思い、たまたま新聞で求人を見つけた洋服屋の服が好きだったことから、そこにアルバイトとして入った。そこでは同年代の人とは仲が良かったが、マネージャーとの関係の悪化や仕事から足に負担がかかりすぎることから、1ヶ月半で退職した。

その後、なんでも話せる高校時代の同級生のエミ⁹による「ひとりじゃイヤ」という誘いから、キャバクラと一緒に働いた。「他にやりたいものもなくて、お金も底をついたから体験入店。最初はやるつもりなかったけどお金が1日でスゴイもらえて（5時間で1万円）、じゃあちょっとやろうかな」という初発の動機だった。ここはエミもいて、人間関係も問題なく「いい店ではあった」が、客にインターネット上で嫌がらせを受けたことや、彼氏（客だった）ができたことで、約4ヶ月で「ばっくれた」。もともと「長くやるつもりはなかったから、少しずつ。けっこう遊び感覚だったかもしれない」とここの働きかたについて述べている。

その後1ヶ月間は「プー」で、「いいかげん仕事しなきゃ」と情報誌を見るも行動に移せず、日にちだけが経ってしまい「そういう自分が嫌だった」と働かない自分に焦りを感じていた。そこで再度父親の会社に入った。同時に再度エミの誘いで一度辞めたキャバクラにも戻った。その際、前回一緒に働いていた後輩に店側とうまく

話をつけてもらった。しかし程なくこの店が未成年者の雇用のため摘発され、営業停止になり、離職することとなった。

現在は父親の会社で約10ヶ月間働きつづけているが、「ずっと働きつづけたくない。〇〇（地元にある若者向け百貨店）で働けるならすぐにでも辞める」という。

⑥独立を期に定着を求める竹内奈央（B高校出身）

竹内は、高校在学時から高卒1年後まで続けたホームセンターでの仕事を、アルバイトには重い責任業務が嫌になり辞めた。その後、3ヶ月の失業・無業期間を経て、家に近くて、仕事が楽そうなドラッグストアのアルバイトを6ヶ月間続けた。しかし、そのころ誕生した弟の育児・家事を手伝うために離職した。8ヶ月後、高校のときの友人の紹介で弁当屋のアルバイトにオープニングスタッフとして入るが、メニューも覚えていないのに休憩なしで一日中働かされたことや、新人の店長が起用されたことなど、会社の方針・アルバイトへの対応に不満を感じ、2ヶ月で辞めた。その2ヶ月後には郵便局のアルバイトを始めるが、勤務体系が合わず6ヶ月で辞めた。このアルバイトを始めるころ、俳優・声優養成所に下川とともに通いはじめる。ここには将来の夢でもある声優コースも併設されており、週1回2時間の講座を受けることとなった。郵便局の仕事を辞めたあとは、5ヶ月間の失業・無業の状態を経て、実家のある団地の掲示板で求人を見つけた学童保育のアルバイトを始めた。この仕事を選んだ動機を次のように話す。

自分が小学生のときに遊びにいったところで、なんとなくどんな仕事か察しがついていたので。

単純に子どもが好きっていうか。自分がもう子どもを産まないって思ってるから、きっとこれから子どもと接することがないだろうから、今やりたいなと思ったんですよ。

この学童保育の仕事は、将来就きたい職業という意味での「やりたいこと」ではないが、これまでの仕事選びにはみられなかったような「やりたい」という気持ちがみえる。仕事も「楽しい」と感じており、児童の保護者からの苦情に疑問、悔しさ（見下されている部分があること）を抱いているものの「お母さんたちにしてみれば、若いし、子どもも産んだことないし、って部分は多少あるかな」と理解を示してもいる。また、このとき同僚からは「気にしないで、溜めないで、どんどん言っていからね」と声をかけられるなど、働きやすい環境にも恵

まれ、インタビュー時までの約5ヶ月間、働きつづけている。途中、彼女は念願だったひとり暮らしを始めるが、その生活費をまかなうためにもう一つコンビニでの仕事を掛け持つこととなる。

家賃が4万なんですけども、学童のほうのお給料が7万前後なんです。ホントにただ暮らすだけならぜんぜんなんとかなると思うんですよ。でもそれじゃあ、まったく余裕がないので、新しいバイトを始めて、たぶん10万くらいだと思うんですよ。それでまあなんとかやっていけるくらいだと思います。

そのコンビニは、彼女がインターネットで求人を見つけたのと同時に、偶然その求人を見つけた父親からも勧めがあったり、学童保育で働いていた人がすでにここで働いていたりという縁もあった。現在は自立した生活を成立させるためアルバイトを掛け持ちしながら、職を転々とするのではなく定着して働くことを求めているように捉えられる。

⑦母親との葛藤のなかで暮らす若林理恵（B高校出身）¹⁰

若林はもともと四年制大学に編入希望だったが、「あの家（母親の厳しい縛りのある家）にいて進学しても疲れるし、バイトしてとっとと（お金）貯めて、とっとと（家）出て、バイトしながら就活したほうがいい、利口だと思った」、「英語も嫌いになった」ため、短大卒業1ヶ月後からせんべい屋でアルバイトを始めた。大学に行くときに求人チラシを見ており、時給もよく、男女が指定されていなかったため応募した。まずアルバイトを選んだことについて次のようにいう。

そのときに友だちが働いて自分のやりたいことをやってたから。じゃあ私もバイトすれば自分のやりたいことがやれると思ってたから。そう信じてたから迷いがなかったんです。就職してやりたくない仕事をしてつまらない日々を過ごすだったら、やりたいバイトをやって楽しんでお金を貯めて就職探したほうが良いと思ったんで。

せんべい屋での仕事は、閑散期は週2回、盆や彼岸、年末年始などの繁盛期はほぼ毎日シフトが入っており、給料も2万5千円から3万7千円とそのつど変動した。仕事内容としては1ヶ月したら焼きの作業もさせてもらえると聞いており期待していたが、実際には袋詰めと販売、醤油漬けや乾燥などの製造の一部のみしかやらせてもらえなかった。

やっぱ女の人は駄目なのかな。そういう伝統的なものっていけないのかな、とか思って。ようやくガテン系のほうに女の人も進出してきたから、いいのかなと思ったら、まだまだ壁は高かったようです。

せんべい屋での仕事は2005年12月いっぱいまで続けていたが、1月に風邪をこじらせ入院した際に、連絡が遅れて無断欠勤ということになり、「実質上クビ」となってしまった。このとき本人は母親が連絡を入れてくれるだろうと思っていたが、実際には母親は連絡しておらず、そこに行き違いがあった。

彼女はこのアルバイトと同時に自宅と祖母の家を往来し、認知症の進んできている祖母の介護もしている。祖母の様子が心配であるため、「一日一回はちゃんと顔をあわせて会話はするようにしている」。

せんべい屋のアルバイトを辞めたあと、母親がもとも働いていたスナックに『手伝ってくれ』といわれたから、頼まれて行き、1ヶ月ほど働いた。時給は1200円だったが、かなり年上の客とのやりとりや、酒を飲まなければならないなどの仕事内容に適応できず、先輩とのトラブルも起きた。また客のセクハラなどもあり、「顔がヒクヒク」するなど体調を崩し、最終的には、仕事に慣れない、適応できないと店側に評価され辞めさせられた。

現在は祖母の介護と病弱な母親の世話を継続しておこなっており、彼女は自身のことを「バリバリのニート」と称しているが、彼女は母親とのあいだに大きな葛藤をかかえていた(4節)。

⑧あらゆる職を転々とする宮本哲史 (B高校出身)

宮本は、高校卒業時からアルバイトとして入った居酒屋を、先輩アルバイトからのいじめにより、3日間で辞めた。次に働いたドラッグストアでも「(18歳だからという理由で)ハブられ」1ヶ月で離職。その後もテレアポの派遣やフィットネスクラブやシャンプーの仕分けなどの仕事を短期間に転々としつつ、数ヶ月間もしていない時期もあった。

高卒1年半後、彼は出入りしているクラブで知り合った外国人に付いて、ロサンゼルスに約2ヶ月間で数回行き来していた。そのあいだ彼はその人に面倒をみてもらうかたちでほとんど働いていなかった。しかし、「ロスで二十歳になったのね。そうすると次からは働こうという欲求が出てきて、そっからはずっと働いてる」、「帰ってきてからはちゃんと働かないといけないと思って」というように、帰国後は転職をくり返しながらも働きつづ

けている。荷物の仕分け業は、ロスでテレビの仕事に興味をもち、芸能関係に進みたいと思ったために辞め、貸衣装レンタル受付の仕事は「コンビニと同じだ」と感じてすぐに辞め、映画館のもぎりのアルバイトでは、上司に理不尽な怒られかたをして、2、3週間で辞めた(3節)。映像チェックの仕事では実際の業務が映像のモザイク処理などで自分の希望とは違う仕事だったため辞めた。さらに劇団の大道具をやろうとしたが、「やりたいスタイルと違いやらなかった」と面接の時点で興味をなくし採用を辞退した。彼はいくつもの仕事を経験し、転職を重ねるなかで、離職すること、およびその次の仕事探しについて次のようにいう。

辞めるときは、自分にとって合ってるかどうかちゃんと考えて、プラスの部分とマイナスの部分の仕事に考えながらもやっけて、それで自分のスタイルに合ってるかどうかを考えてる。自分としては学んでる。理由がある。いろんな自信がある。無駄になってない。これから先も仕事ができるような自信がついた。

これだ、って仕事は特にないな。ほとんどアルバイト情報誌をバア〜とみて、これも知ってるこれも知ってる全部知ってる、みたいな。他にないの?って。

彼は、職場で孤立させられるような環境に追いやりられたり、上司とのトラブルがあったりしても、それだけを離職の理由とはせずに、自分自身にとってのその仕事のプラス面、マイナス面を考察し、その過程で働くことにたいする「自分のスタイル」を確立させようとしている。それは一つの仕事ではなく、あらゆる業種のものを経験するなかで、その積み重ねからなされている。それが彼の「自信」となっているが、その「自信」とは、仕事によって身につけた専門的知識や技能、資格に裏打ちされるものではなく、いくつもの仕事を「やってこれた」という実感により担保されたものである。

現在は携帯電話の修理会社に派遣社員として8ヶ月間勤務を継続している。同じことのくり返しや単純作業が好きではないのでこの仕事を選んだ。ここでは自身でも「長く働いて」と感じているが、「こんな性格だから仕事いつ辞めちゃうかもしれないじゃん」という。

⑨定着した職場をもちつつ他の職への意欲をみせる田辺薫 (A高校出身)

田辺は高校卒業後、弁当屋や歯医者などでアルバイトをしたが、1週間程度で辞めたり、パン屋での採用も断っ

たりしていた。弁当屋では「弁当屋のおやじ」による「言葉のセクハラ」が「ものすごく気持ち悪く」、友人とも会う機会がないため「ストレスのはけ口」がないなかで、「耐える生活したくない」と辞めた。夏から始めたコンビニでのアルバイトは、インタビュー時まで2年4ヶ月間続けている¹¹。コンビニはスタッフが少なく、休む時に代わりの人を探すのが大変だが、一緒に勤務することの多いマネージャーは、掛け持ちしていた別のアルバイトについての愚痴を聴いてくれるなど、彼女を「癒して」くれる存在となっている。もう一人のスタッフ（主婦）とは夜に遊んだりするが、「他の人間関係わかんない。3人は仲がいい」という。一時期は離職することも考えていたが、今では「働きやすい」と感じるようになり、「仕事」というよりは「趣味」的なものとして捉えている。

途中、辞めようと思った。仕事に飽きた。辞めるんだったら次の人を探して、次の仕事きちんとしないと。次の仕事もやりたいって感じのものもないし、どうするかってズルズルきてたら、仕事楽しくなってきた。

彼女はコンビニと並行して、いくつかアルバイトを掛け持ちした。介護や保育への興味から介護のアルバイトを始めたが、「マニュアルないから先輩に教えてもらったり、自分で考えるのが難しい」「卒業してすぐだからまだ手をつけちゃいけない、ちゃんと勉強してから」「一番辛かった」「自分の考えが浅はかだった」「介護は合わないな」と考え4ヶ月で辞める。また、「ちょっとやってみるかな」と地元のファミリーレストラン（以下、「ファミレス」）のアルバイトをオープニングスタッフとして始めたが制服が肌に合わず通院することになったり、入れ替わった副店長とそりが合わなかったりしたことから11ヶ月で辞めるなど、いずれも短期間に離職した。

その後、彼女は「無性に勉強がしたく」なり、「どうせ勉強するんだったら、その後につながるもの、実になるものにしよう」ということから医療事務の有料講座（15万円くらい）を受講し、その資格を取得した。その資格をもって彼女は正規雇用就職に挑むが、現実はその簡単ではなかった。これまでずっとフリーターとして生活してきた彼女にとって初めての就職活動で、学校からの手引きもなく、「全部一から自分で」電話、履歴書、アピール文などを考えなければならなかった。毎週求人誌を買って求人を探るなど、「だいたい探した」が、「初心者歓迎みたいななかなかなくて、断念したんですよ、就職。もう、ちょっと無理」という。もちろんハローワークにも足を延ばしているが、「即戦力がやっぱり欲

しいみたいで、初心者から大丈夫ですみたいなのはあんまりなくて」と、そこでもせっかく取った資格を活かせる職に就くことはできなかった。「でも就職じゃなくても、せっかく資格取ったからバイトでもいいかなと思って。とりあえずやってみよう」と、引き続き非正規雇用への道を選択するに至った。

その後、大手フィルム会社で600人の募集がかかった短期バイトで働いた。ここでは、短期バイト3名、ヘルプも入れて社員2名、長期バイト1名の計6名でカレンダーづくりを担当する小さな課で働いていたが、その過程で感じたことを次のようにいう。

いっぱい仕事をしてきて、仕事にたいする意識っていうか、責任感は、ちょっとついたかなって感じ。自分の行動にたいする責任感っていうんですか。集団生活とはまた違う、仕事における協調性を学んだっていうか、すべて仕事のサイクルのなかで、すべてのことを一人じゃやっていけないじゃないですか。そういうのをどうみんなと円滑にやっていくかっていうことを、ちょっとみられるようになった。それはこの短期のバイトを始めて感じたんですよ。それまでコンビニのときはぜんぜん感じなかったんですけど。高校のときとかバイトしてた時はすごい人と仲よくなるのにも時間がかかったし、仕事を覚えるのもすごい時間がかかったし、周りまでみられなかったんですよ。どうしてるとか、誰がこうすることによって迷惑をすとか、そういうことがわからなかったんですけど、短期のバイトに入って、けっこうふとしたときに客観的にみてる自分がいて、ちょっとみれるようになったのは、学べてよかったなって思いますね。円滑に仕事が回ってる楽しさっていうか。職場の人間関係もよくて、仕事もスムーズでっていうと、なんかもう楽しくなってくるじゃないですか。それでそこにお金がついてきて、みたいな。

田辺はコンビニでのアルバイトを「趣味的」に長く定着して続けてきた一方、そこでは味わえなかった仕事の「やりがい」を短期バイトのなかでみつけた。それは「やりたいこと」につながる仕事の内容というようなものではなく、「仕事が回ってる」という働きかたそのものにみいだされていた。そのうえで彼女は、フリーターとして数多くの仕事をするについて次のようにいう。

もっといろんな仕事をしとけばよかったって最近ずっと思って、去年とかぜんぜん何もしてなかったじゃないですか、ずっともったいないことしたなと思って。もっとやってみよう、最近になってやってみようって思うバイトはいっぱいあって。

彼女は多くの仕事を経験すること、すなわちアルバイトを渡り歩いていくことを、積極的に選択しようとしている。しかし5年後の将来については「ぜんぜんわかんない」「仕事はしてると思いますけど、何をしてるのか、もしかしてフェイントで結婚してるかも」と不明瞭である。

⑩役者をめざす岡本祥子（A高校出身）

岡本は役者として成功するために専門学校を卒業し、プロダクションにも所属し、みずから「役者」であると紹介する。しかし、「でも今はほとんどがアルバイトで役者らしいことをしてないんですけど」とつけ加える。プロダクションに所属しながらも「フリーター」のような生活になってからまだ11ヶ月とその期間は短い。役者修行のかたわら、高校生のところから現在まで、酒屋兼コンビニでアルバイトとして働きつづけている。その他にも、稽古がない期間は、プロダクションの紹介で劇のスポンサー会社での短期の派遣業務をしている。その仕事内容は、ガソリンスタンドでのカードの勧誘やパチンコ屋のイベントなどである。コンビニは時給820円で月に14万円ほどの収入となる。そこから芝居の資金に2万円、年金、携帯電話代、交通費を出すとともに、親と同居ではあるが「私も働いているんで」という理由から、食費は自己負担している。彼女は収入のメインとなるこのコンビニでのアルバイトを続けてこられたことについて次のように話す。

都合がいいんです。急に打ち合わせがあったり稽古が入ったりするんで、それで調整してくれるところなので。他のところだと辞めなきゃならないので。舞台稽古だと1ヶ月休むとかはざらなんで。そういうときに休ませてもらえるので。

コンビニのオーナー夫婦とも関係が長くなり、事情をよく知られているため、「応援する立場にもなってもらって」おり、稽古の都合で仕事の日程をかなり自由に調整できることを、そこに定着して働きつづけていられる理由として挙げている。

⑪結婚を目前に控えた岸田さやか（B高校出身）

岸田は高校卒業後から始めた地元のスーパーでのパートを1年弱続けた。またその後1ヶ月間の求職活動を経て、交際相手の相良の家の近くのホームセンターにアルバイトとして勤務し、1年10ヶ月になる。転職はしているものの、前述したような仕事を転々としている者たちよりも、長期間同じ職場に定着して働いている。スー

パーではレジ打ちでの失敗や人間関係のストレスの相談相手だった同僚（高校のときの友人）が辞め、相談できる人がいなくなったのをきっかけに離職した。ホームセンターでは、契約時の午後5時から午後7時という短い勤務時間とは違う時間帯での勤務や超過勤務、パートの人がいないときの代行動務などもさせられているが、「実際は気持ちは入りたいと思ってても、やっぱり嫌なことも出てくると思うんですよ。そんなに入ったら。だから、今のまんまでいいのかな」と話す。短い勤務時間であることを、自分のライフスタイルと照らし合わせたなかで、仕事を長く続けていく条件としていることがわかる。

相良とは結婚を目前に控え、互いの実家に泊まりあうなど「半同棲」的な生活をしている。岸田は給料の全額を両家の家計に充ててきた。スーパーで働いていたころは7～8万円の収入があり、岸田家には岸田が3万円と相良が1万円、相良家には岸田が1万円と相良が5万円を入れていた。ホームセンターで働きはじめてからは給料が減ったため、彼女の給料全額を岸田家の家計に（家族の借金返済に充てている）入れることとなり、岸田は相良家には支援できなくなった。相良が実家に入れた残りをふたりの将来基金に充てている。将来お金が貯まったら互いの家を出て相良とのふたり暮らしを考えている。

2) 小括

ここで紹介した11名のそれぞれの事情や状況から、ここでのフリーターについていくつかの特徴を指摘する。また、そこから浮かびあがる検討課題を提示したい。

第一に、彼ら彼女らの多くが数多くの仕事を渡り歩いており、そのあいだに何度かの失業・無業期間を挟んでいたということである。ある程度長期的に一つの職場に定着していた者も、同時に他の仕事を掛け持ちし、そちらでは短期間の雇用と離職がくり返されていた。しかし、その短期間の雇用・離職のサイクルは、ほとんどの場合、本人がもともと望んでのことではなかった。浜野や竹内、田辺にみるように、就労中に人間関係にトラブルをかかえ、それが結果的に離職につながったり、若林のように仕事内容が厳しく、それに「慣れる」ことができずに辞職を迫られたり、西澤や庄山のように、廃業など雇用側の都合で退職せざるをえなかったりなど、彼ら彼女ら本人には予想外のできことの結果としての離職がその大半であった。下川の短期派遣業務も長期での雇用の期待を抱かせる説明を事前に聞いていたものだった。

一方、みずから望んで短期就労を選択するケースもあった。西澤のキャバクラなどでの転職は、いかに働き

つづけるか（収入を得つづけるか）の「戦術」の一つとしてであり、厳しい業種のなかで「使い捨て」られることを回避するための選択であった。田辺は、写真屋での短期バイトを選んでいるが、ファミレスを辞めたあと「仕事したくない病」であったとっており、実際にその後写真屋でのアルバイトを始めるまでに長い期間があった。そのことから、ファミレスでの厳しい働かされたが、その後に短期の仕事を選択させた背景にあるとも考えられる。岡本は、舞台の稽古がない時期に短期バイトをしており、舞台中心の生活設計ができるかどうか重要であった。

これらのことから、短期間での雇用・離職のサイクルが、若者の「職業観・就業意識の低下」¹²によるものなのだという点にかんして、もっといねいに検討しなければいけないという課題を挙げることができる（3節）。

第二に、彼ら彼女らは短期的に転職をくり返ししながら（そして長期に定着している仕事もちながら）、その多くは複数の仕事を掛け持ちしていた。西澤や庄山のように、労働時間を合わせると日中から深夜もしくは早朝まで働いている者や、田辺のように出勤する曜日、時間を組み合わせながら同時期に三つの仕事を掛け持ちしていた。その場合、それぞれの職場での労働時間が週30時間以上とはならず、社会保険適用除外労働時間にしかないという厳しい実態も見逃せない。

このようなアルバイトの掛け持ちには、浜野や庄山、田辺をはじめとする彼ら彼女らの多くが、一家の「稼ぎ手」として家計を支援しており、一つのアルバイトではまかないきれないという背景がある（4節）。竹内のように独立して生活を営もうとするときにも、仕事を掛け持ちしないと生活自体が成り立たない。「フリーター」という働きかたにおいては、安定した生活を営むにも限界があると捉えることができよう¹³。

第三に、にもかかわらず、フリーターとなった彼ら彼女らは、この不安定なフリーターという層に位置づいたままである。今回の11名中、6名は高校卒業後一度は正規雇用で就職したり、進学したりしている。残りの者も進学のための資金稼ぎや将来就きたい職業のための準備期間としてこのフリーターを位置づけており、初めからフリーターを「めざした」者ではなかった。竹内、下川は俳優・声優養成所に通いはじめたが、週1回2時間という時間でどれだけ声優という職業に近づけるのかは不明である。さらに下川は、アルバイトもみつからず金銭的余裕がなくなり、養成所を休止する結果となった。また宮本も、俳優という夢をもちながらもそれに近づけている感がない。田辺は取得した資格を活かしての就職もできず、フリーターとして働きつづけている。また庄山や西澤は金銭的余裕のなさから現状を抜け出せずにいる。浜野は正規社員の過剰な働きかたに疑問を抱きはじ

卒業	2003年	2004年	2005年	2006年(1~3月)
浜野美帆	美容室正規就職 2004年6月退職	パチンコ* 倉庫* カラオケ*	派遣* テレアポ 約5ヵ月継続 (*時期詳細不明)	化粧品 研修
下川彩乃	正規就職 2004年2月退職	自動車免許 取得	2004年10月から 派遣(税務署) 声優養成所(週1) 梱包 書籍	
西澤菜穂子	正規就職 7月退職	いっつか 登録バイト クラブ	パチンコ キャバ キャバ 水商売 転々と水 商売	2005年4月から キャバ 11月から 漫画喫茶
庄山真紀	弁当屋(2006年3月退職)			
	中華料理屋 クラブ	キャバ キャバ	10月~4月 水商売	2005年6月から カラオケ
吉川 綾	専門学校 退学	11月~1月 花屋	3月~6月 介護事務 服屋	12月~3月 キャバクラ 2005年5月から 介護事務 キャバクラ
竹内奈央	ホーム センター	6月から11月 ドラッグストア	弁当	2004年10月から 声優養成所(週1) 10月~3月 郵便局 7月から 学童保育 コンビニ
若林理恵	短大			卒業 4月~12月 せんべい屋 スナック
宮本哲史	居酒屋 ドラッグ ストア	派遣 イントラ	働いたり 働かなかったり	仕分け、受付、 画像チェック 他 7月から現在まで 携帯電話修理
田辺 薫	弁当 歯医者	2003年8月から コンビニ 9月~12月 介護 医療事務資格 写真屋(短期) 10月~8月 ファミレス		
岡本祥子	演劇系専門学校 卒業 プロダクション コンビニ(兼酒屋) 高校生の頃からずっと GS、パチンコ			
岸田さやか	2003年6月~2004年4月 スーパーマーケット		2004年6月から ホームセンター	

・網掛けは失業、無業期間を示す。
・各項の幅は実際の期間とは多少の誤差がある。

図1 フリーター11名の3年間の経緯

め、それへの期待も失いつつある。このようにさまざまな背景のなかで、彼ら彼女らは無業期間も含めたフリーターという不安定な働きかたのなかに滞留している。

そして、この不安定なフリーター生活を支えたり、互いに影響を与えあったりするものとして、家族との関係や地元つながりのネットワークの存在が彼ら彼女らによって語られている。これらの存在が彼ら彼女らの不安定な働きかたとどのように関係しているのかということが検討課題として浮かびあがる（家族については4節、地元つながりのネットワークについては5節）。

3. 働きづらい職場を経て

フリーター11名に、現在もしくは以前働いていた仕事の時給にかんする質問をしたとき、大半の若者たちが「時給は750円です」とか「最初800円スタートで、でも830円ぐらいまで上がったのかな」などと金額だけをさらりと答えている。そのなかで、時給のことを働きかたや生活にふれるかたちで語ってくれたのは下川と浜野の2名だけだった。下川は仕事を探そうえでの条件について、「なるべくなら（時給は）800円くらいがいい」と話す一方、「（仕事を）初めっから教えてくれる」ことや、気持ちを切り替えるために「通勤時間は長くてもいい」ということを挙げるなど、かならずしも時給の高さにこだわっているわけではなかった。テレアポをしている浜野は、研修時1500円だった時給が、その後は実績で計算され1050円となったことに不満を感じていた。しかし、そのとき次のアルバイト先候補として、テレアポよりも200円も時給が下がるお菓子屋のアルバイトを予定していた。浜野も時給が不満で転職を考えたのではなかった¹⁴。

本調査時において、上記の2名を含むフリーター11名はみな、時給の額を離職理由として語っていない¹⁵。彼ら彼女らのうち6名が、「店長」「上司」「マネージャー」など、いわゆる「中間管理職たる上司」¹⁶（以下「上司」）との関係に働きづらさを感じていたと口々に語っている。

ここでは、半数以上もの若者たちが語る「上司」との関係に焦点をしばり、ひとつのところで働きづげられない理由の背景を明らかにしていきたい。なお、個々の若者が何度か経験してきた離職・転職について余すことなく私たちが聴き取れたわけではない。むしろ、複数経験している就労経験のなかで、彼ら彼女ら自身が話してくれたもっとも印象に残った職場での離職にかかわる文脈のなかで、「上司」の話題が出たことに注目し

て分析をしていることを、あらかじめ断っておく。

1) 「上司」との関係

①語られる「上司」への不満

離職の直接の理由として「上司」との関係を挙げたのは、6名の若者（庄山・竹内・吉川・浜野・田辺・宮本）だった。いくつもの仕事を経験している彼ら彼女らは、離職、転職に至る語りのなかで、次のように「上司」への不満を口にしている。

「その人（異動で来た弁当屋のマネージャー）がずっと辞めなかったんですよ（3カ月経っても他店へ異動しなかった）。（中略）その人のおかげで体調がボロボロで。（中略）私嫌いな人って嫌いだから、しゃべらないし。その人にかんしてはその人の名前を思い出すだけでウツてなっちゃって。（中略）びっくりするくらい仕事ができない。（中略）仕事ができなくて、パートの人に全部押しつけてて。」（庄山）

「なんか、すごく納得がいかなかったんですよ。会社の方針とか（上司の）私たちにたいする態度とか、すべてにおいて。」（竹内）

「マネージャーがちゃんと仕事してるのに（吉川に）いちゃもんつける。マネージャーがダメなの。」（吉川）

「追いつめられるとキツイから、（受注のしかたについて）すごい勉強してるけど、（マネージャーに）わかっているのに言われる（指導される）のがとても腹がたつ。（中略）なにか合わないなって。人間関係。」（浜野）

「副店長がこの時期（仕事先の制服が原因で肌荒れをして病院に通う）に替わって、まったくソリが合わなくて。」（田辺）

「（上司に）『たわけもの』って言われて。でも僕はそのときに仕事を習ってなかっただけで、百歩ゆずって僕が悪かったとしても、そういう言いかたはよくないと思うし。（中略）そのときはもう、辞める気でいたからね、僕は。」（宮本）

この6名は異口同音に「上司」との関係からくる働きづらさを口にしていた。他方で、彼ら彼女らのなかには、下記のようにアルバイトどうしの関係は良好であると語っている者が少なくない。職場での人間関係のトラブルはもっぱら「上司」との関係において起きており、それが後述するように離職と関連していると考えられる。

「（異動前のマネージャーが）女の人だからよかったのかもしれないですけど、（パートやアルバイトも）みんなフレンドリーですごくいい仕事できたんですよ。」（庄山）

「（アルバイト間の人間関係）は、よかったんですよね。やっぱりオープニングスタッフだったから、団結力があるってい

うか、みんな仲が良くて、スタートが一緒だから社員だけ上で、あとはバイトはみんな一緒だから働きやすかったんですけど。」(田辺)

「[どんなことが楽しかった?] 同年代の子とか多かったから、お客さんとかいないときにちょっと立ち話とかしててね、楽しいときは楽しかったんだけど、マネージャーかな、なんか女の人がいるんだけど、その人が嫌な人でさ、ちゃんと仕事してんのみんなにいちかもんつけてくるの。」(吉川)

「人間関係はいいですよ。バイトの関係はみんな仲がいいんですけど。」(浜野)

②「上司」との人間関係の実際

こうした「上司」への不満は、どのような上司との関係によって彼ら彼女らのうちに蓄積されたのだろうか。ケースにそってみていこう。

②-1 庄山のケース

高卒後3年間弁当屋で働いていた庄山は、人事異動で新しく来たマネージャーとそりが合わず、そのストレスにより体調を崩したことで離職している。彼女はマネージャーとの関係について、以下のように語る。

(新しく来たマネージャーが)びっくりするくらい仕事ができない。今までのマネージャーはちゃんと「面接がうちの店であるから(応募した人が)何時に来ます」とか、「新商品が始まるからこうしてください」みたいなのが絶対あったのに、そのマネージャーは何もなくて。知らない人が勝手に「面接に来たんですけど」みたいなことや、急にスタッフが来て品物を持っていこうとして、店の発注は私がやってたから、「何してるんですか」って(聞いたり)。(中略)パートの人に全部押しつけて。もう無理だと思って。(中略)マネージャーより(立場が)ちょっと上の人(その人のことが)ホントに嫌い(中略)社員の作る弁当ってすごい汚いんですよ。おしんこ(の量)も指定されてるんですけど、それより少ないんですよ。幕の内弁当なんか貧相弁当じゃんって。私そういうの嫌だから見映えよく作ってるつもりだし。その人(マネージャーより(立場が)ちょっと上の人)に休憩入っていいよって言われたとき、カチンときて少し爆発しちゃって。自分でもわからないくらいにヒステリックになっちゃって、「すいませんもうダメなんで帰らせてください」って言って、泣きながら帰って。家でずっと泣いて、仕事いきたくないって。お母さんもそれみてもう休みなって言ってきて。自分でも初めての経験だしわからなくて。

庄山はマネージャーの人事異動前は職場の人間関係も

よく、「出会う人がよかったから、ここまでこれた」という。しかし新マネージャーにたいして、このような業務上の不満や、病気欠勤の申し出を一方的に拒否されたこと(後述)から、「それで、その人(マネージャー)がホントにダメになって。人間じゃないんだろう」と不信感を抱くようになった。さらに「マネージャーより(立場が)ちょっと上の人」とのトラブルもあった。このことを契機に彼女は、「一週間、点滴通ってとか。意味もわからない病気になっちゃって顔がブツブツになっちゃって、腫れあがっちゃって。すごい体調悪くて、続けられないと思って」しばらく休養をとった。さらに「庄山さんは忙しすぎる」と、新マネージャーによって勝手に相談もなくシフトを変えられてしまった。彼女は「チェーン店でがんばってみても意味がない。やった分を評価してくれないからがんばる必要もない」と仕事にたいする意識も大きく変化し、「もう、いいや」と離職してしまう。

②-2 竹内のケース

竹内は、友人の紹介で弁当屋のオープニングスタッフの面接を受け、面接当日から働きはじめて、その2ヵ月後に離職した。彼女はその理由を、次のような「店長になる予定の人」にたいする具体的な不満として挙げた。

まだ入って何週間も経ってない状態なのに、私の友だちと店長になる予定の人と二人で(開店祝い兼顔合わせの)食事会にいくっていうんですよ。それでメニュー自体も覚えていないのに、新しい人二人だけで休憩もなくなって一日通しでやれっていうんですよ。しかも食事会の話は内密で、みたいな感じで。それを私は友だちから聞いたんですよ。本来だったらそれは私たちに告げられない話なんです。これもなんかおかしくない?って思って。なんかそしたら仕事がつまらなくなってしまう。

このような不満とともに、客のクレームに謝ることは「(自分たちの失敗を)認めることだから、謝らないで」という接客面での会社の方針を含めた「すべて」において「なに、ここ。ちょっとおかしい」と感じ、結果、同期の4名中3名がいつせいに辞職した。

②-3 宮本のケース

宮本は、高校卒業後からアルバイトを転々としており、離職理由の多くを人間関係によるものとして語っていた¹⁷。本調査時は、彼が映画の受付の仕事で上司とトラブルになった話をしてくれた。映画館の受付のアルバイトを始

めて1週間後、彼は上司にチケットの「もぎり」の仕事を「おまえはこれやったことあるだろ」と任される。そのとき、彼はその仕事についてわかっていなかったが、「いつも同じようなことはやってたから、それと同じでいいんじゃないか、と思って」作業をしていた。すると、その上司から「おまえは何をやってるんだ、おまえはどういうふうに教わったんだ、誰に教わったんだ？」と聞かれたため、「こういうふうに習いました」と答えた。実は、宮本はきちんと習ってはいなかった。そう答えると、上司は大声で「たわけもの」と怒鳴りつけられたそう。宮本はこのとき「たわけものじゃないです」と大きな声でいい、次のように言い返したと話す。

僕はそのときに仕事を習ってなかっただけで、百歩ゆずって僕が悪かったとしても、そういう言いかたはよくないと思うし、僕は仕事覚える気があるから、ちゃんと教えてくれればちゃんと覚えるし、ちゃんと教えてくれて覚えてないんだら、それは「たわけもの」とか言われてもしかたないんだらうけど。こっちとしてもやる気が起きてここに入ったわけだから、そういう言いかたは嫌いだ。

彼はこのとき「もう辞める気でいた」という。上司はこれにたいし「今どきなかなかない若者だ」と継続して仕事を任せてくれたため、この直後には仕事を辞めなかったが、その3、4週間後に離職した。その離職理由を私たちがたずねたときに、彼がこのことを語ったということは、この上司との関係が離職に少なからず影響したのであろう。

②-4 浜野のケース

テレアポのアルバイトを続けている浜野は、なかなか契約が取れなかったり、正規社員の営業と成績を比べられながらも、「(営業成績で) 追いつめられ」ないように「毎日毎日社員以上に働いて」「すごい勉強して」いた。にもかかわらず、「わかっているのに(マネージャーに指導を) 言われる」ことに「腹が立」ち、「やっぱり合わない」と彼女は離職を考えている。

この4人の語りから、いずれも本人たちが十分に仕事にたいする意識や自負、能力、やる気をもっていてもかかわらず、その職場での「中間管理職たる上司」との人間関係のつまずきや関係性の構築が困難な場面を経験し、離職に至っていることがわかる。

2) 中間管理職の働きかた

このように、彼ら彼女らの離職に至る経緯の語りのなかに、マネージャーや店長などの「上司」との関係の困難がみられる。しかし、それらの上司たちを、彼ら彼女らがラベリングするような「仕事のできない上司」「嫌な上司」といった個人の資質にたいする評価のみで片づけていいのだろうか。「上司」の働きかたの実際を、彼ら彼女らの語りから描きだすことには限界があるが、そのことを承知しつつ、近年とりあげられている労働問題にかかわらせながらいくつかの視点を浮かびあがらせてみよう。

①管理職に必要な研修の不十分さ

庄山の弁当屋の「異動してきたマネージャー」は、新人の面接日時や新商品の伝達事項をパートやアルバイトに伝えなかったり、店の発注をアルバイトの庄山に任せっぱなしにしたりしている。また彼女の話によれば、弁当の作りかたにおいても、指定されたおしんこの量を減らしたり、アルバイトである庄山が「貧相弁当じゃん」と感じるような幕の内弁当を作ったりと、本来ならばアルバイトに指導する立場であるマネージャーがたしかに技術を身につけていない様子である。

竹内はオープニングスタッフのアルバイトとして働く弁当屋の「店長になる予定の人」について、「(働きはじめ) スタートは私たちとまったく同じ人だったんですけど、なんかアーって感じだった」という。この「店長になる予定の人」は、社長との食事会に出席するため、まだメニュー自体も覚えていない竹内ともう一人の新人の2名だけで休憩もなく一日通して店を任せた。オープンしたての店を新人だけに任せなければいけない状況をつくってしまった「店長になる予定の人」の責任が問われるだろう。

これらのケースからは、「上司」が十分な研修を受けず管理能力が養われていない様子がうかがえるとともに、それにもかかわらず「マネージャー」や「店長」などの仕事を任されてしまい、その結果、部下であるアルバイトからの信頼を得られずにいるという「上司」の働きかたの実際がみてとれる。

②異動の多さ

田辺のアルバイト先のファミレスで、彼女と「そりが合わな」かった副店長は、オープンから8ヶ月後に異動してきており、庄山が関係づくりにつまずいた弁当屋のマネージャーもまた異動してきていた。労働・社会運動を研究しているタノックは、アメリカのファーストフード店のマネージャーはたいてい、着任してすぐに転任し、

その結果、職場の従業員たちは、マネージャーが交代するたびに新しい人間関係を構築しなければならず、そのストレス、疲労も激しくなると指摘している¹⁸。田辺や庄山のケースでも、上司の異動が関係づくりのつまずきの契機として語られている。本調査におけるファミレスや弁当屋も、そこでの上司の異動の多さがアルバイトとの関係構築の困難さを生みだしていると考えられる。

③勤務時間の長さ

上記の6名の語りのなかで登場した上司が超過勤務をしていたということは確認できなかった。しかし、他の者において職場での上司が超過勤務をしていたという語りはいくつかあった。

田辺が働いているコンビニのマネージャーは、従業員が少ないため「朝から夜まで」働いていた。

西澤がアルバイトとして入っている漫画喫茶の店長は、アルバイトの「バツクレ」（職場に突然来なくなる、辞める）が多いため、長時間労働を余儀なくされている。インタビュー当日も店長がシフトに入っていなかった西澤に「お願いだから出て」と頼んでいた。西澤は「店長はもう（連続で）40時間労働くらいしてて、これ死んじやうな」と店長の働きかたについて話している。

このような「上司」の超過勤務は、とりわけ外食産業のチェーン店において顕著にみられ、結果的に「上司」の離職者を生みだしているという。日本マクドナルドユニオン中央執行委員長の栗原弘昭氏は、労組結成の背景について「人がどんどん辞めていることが大きい」と述べ、営業時間の延長や店舗の24時間化によって、「店長の下にいるアシスタントマネージャーの残業や休日出勤が増え、彼らが退職している。店長もベテランだけでなく、なってから1年前後の若手も辞めている」と「上司」の労働条件の悪化が離職につながっていると述べている¹⁹。本調査では上記の2例だけではなく、前述のファミレスや弁当屋などの「上司」も超過勤務にあったものと推測できる。そこから発生する「上司」の離職が、②のような「上司」の異動の多さ、そして職場での関係づくりの困難さにつながるとも考えられる。

3) 非正規雇用者の労働条件

では「上司」の働きづらさは、非正規雇用であるフリーターの彼ら彼女らの働きかたに、実際どのような影響を与えているのだろうか。

前述のように、竹内はファミレスで「店長になる予定の人」が出かけなければいけないために、新人2名だけで休憩もなく一日通して店を任せられるというシフトを強

いられることとなった。

庄山は弁当屋で、病欠の場合は1週間前に報告しなければならないという、あまりに理不尽な要求をされていた。実際に彼女は体調を崩し欠勤したいと会社に電話をしたが、そのときのマネージャーの対応は、次のようなものだった。

休ませてくれっていても休ませてくれないんですよ。体調崩してるのに、本当に扁桃腺とか腫らして喋れない。飲まず食わずの状態喋れなくて、そのなかで休まなきゃいけないからと思って、泣きながら電話して、すいません今日休ませてくださいって。（そしたらマネージャーは）「自分で（代わりの）相手を見つけるか、いなかったら自力で出てきてください」って（電話を）切られて。それでその人がホントにダメになって。

このことを契機に彼女は「意味もわからない病気」になり、しばらく休養をとったが、その後「庄山さんは忙しすぎる」と、新マネージャーによって相談もなく、9時から22時までのシフトを9時から17時までに変えられてしまった。

また、直接的な「上司」の判断、態度や行動ではなく、経営トップによる就業規則の変更が、直属の上司とアルバイトとのあいだに摩擦を与えているケースもある。浜野のテレアポでは、研修時とそれ以後では賃金が下がり、休日の取りかたも変わった。会社経営者の変更にともない労働条件も変更されたとのことだが、浜野自身はそのことをよく理解することができず、「本当にうちの会社おかしい」ともいっている。ここでは会社の経営方針の転換が非正規雇用者の労働条件の変更というしわ寄せとして現れることや、それにたいする上司の説明責任の問題としても引き取れよう。

このように、彼ら彼女らがアルバイトとして働く職場には、シフト編成にみる勤務体制や賃金の変更という労働条件の面で、働きづらい実態があることがわかった。しかも問題が、「中間管理職たる上司」との関係のつまずきと一緒に語られており、庄山の場合はその関係性から身体的健康を損なうということにまで至っていた。私たちは先に、上司との関係づくりの困難さは、上司の働きづらさにも起因しているというこのことを述べた。ということは、この上司の働きづらさが、彼ら彼女らが働きづらいと感じる非正規雇用者の労働条件の整備・管理にも影響していると考えられるだろう。

4) 小括

ここまでみてきた上司との人間関係形成の困難(1項)と、「管理職たる上司」の働きかた(2項)、そして非正規雇用の労働条件(3項)を考えあわせると、実は1項で語られていた人間関係のつまずきが、2項でみたような、非常に働きづらい職場環境にいる「管理職たる上司」の働きかたに起因していたことがわかる。そして、そのような「上司」の働きかたや経営側の運営方針などが重なりあいながら、非正規雇用のシフトなどの勤務体制や賃金体系という労働条件が大変働きづらいものになっているという構造的な問題としてみる事ができる。つまり、正規・非正規雇用両者をとりまく働きづらい労働条件が、職場での良好な人間関係の構築を困難なものにしていると考えられる。それにもかかわらず、彼ら彼女らは、離職せざるをえなくなった理由を、労働条件という構造的な問題としてではなく、個人的な人間関係の問題としてひきうけ、離職という個人的な方法で解決しているのである。一方その過程で、彼ら彼女らが上司に言い返したり話し合いをもったりといった行動をとるケースを、少ないながらもみることができた。そのことが今後どのような可能性をもつかについては後述したい。

4. 働くことと家族

ここでは、本調査時フリーターであった者の働くことと家族との関係について検討をおこなう。前回までの調査では、家庭の経済的理由が若者の移行を困難にしていること、移行過程に困難がある場合の受け皿としてフリーターがあること、彼ら彼女らの多くが「稼ぎ手」の一部としての地位にあること、また家事を手伝ったり、親の健康を気遣ったりする若者がいるということがわかった²⁰。では、彼ら彼女らがフリーター生活を続けてきたもしくは新たに参入してきたなかで、そのような関係に変化はみられたのだろうか。

1) フリーターの家庭階層と家計負担

今回フリーターとして分類された11名のうちひとり親家庭の者は6名と半数以上を占めており、いずれも母子家庭である²¹。また、2回目調査時に生活保護を受けていた若林の家庭は、今回調査時でも引き続き受給していた。そのようななかでみずから家計を支える立場にいる者も多くいる。浜野は母子家庭で収入の全額(10万円以上)を家計に入れていた。吉川の家庭も母子家庭であるが、キャバクラでアルバイトをしていたときは週

に1万5千円ずつ、月額6万円を家計に入れていた。田辺は前回調査時は親の会社(工事関係の自営業)の経営が芳しくなく、収入のほぼ全額を家計に入れていたが、今回インタビュー時は月8万の収入のうち半分を家計負担に充てていた。役者をめざす岡本は、収入は不定額であるが、「私も働いているんで」と語りながら自分の食費は自分でまかなうなど、家計に負担をかけないしていた。庄山の家庭は母子家庭であるが、彼女が光熱費の全額を負担していた。そのほかキャバクラなど水商売で働いていたときは、かなり多額を入れていたこともあった。しかし、彼女の母親が交通事故に遭ってから、さらに彼女の家計負担は増していった。彼女は母親と家計の状況について次のように語る。

お母さんが交通事故に遭ってけっこう長いあいだ入院したときに、病気が何個も見つかったって。ホステスだから仕事の時間だけでいいのに、お酒が好きなんですよね。たぶん依存症に近いと思うんですけど。そのせいで糖尿病もマックスくらい。(中略)ホントは病院行かない方がいいんですけど、お金ないとかいって、行く気もないんですよ。本当にどうしようかと思って、相談できる人もいないし。交通事故のお金もまだもらってなくて、うちは火の車です。お金の蓄えがないから、片親だし、頼れる人もいないから、うちの光熱費は全部自分が払うようになって、それプラス最近2万円くらいは余裕があれば出して、(全部で)約5万円くらい。

彼女は母親の治療費も負担しており、それまでの彼女自身の貯金も「事故に遭っちゃって、ゼロになっ」てしまった。そのときに西澤が「資金稼ぎ」として水商売の働き口を紹介したりしていた。

このように、彼ら彼女らは、これまでの調査と同様、母子家庭、生活保護受給家庭など低所得層の家庭にいる者が多く、彼ら彼女ら自身も一家の「稼ぎ手」として収入を得る必要に迫られている。1節と考えあわせれば、アルバイトを掛け持ちしてぎりぎりの生活をしてまでも家計を捻出しようとしている者がいることがわかる。また、その「稼ぎ手」という立場はこの調査継続期間でも変わることがなく、固定化される傾向にあると捉えることができる。このように、ここでみるフリーターの若者たちは、社会学者の山田が指摘するような「制約のない自由な」フリーター像²²とは大きく異なる状況にあるのである。

2) フリーターが働くことと家族

このような、彼ら彼女らが一家の「稼ぎ手」として家

庭のなかに位置づいているという語りのなかで、強い親子間葛藤を語る者もいた。ここでは、彼女自身の雇用・失業・無業といった不安定な状態と家族関係・親子間葛藤がどのように関係しているか検討したい。

①下川彩乃のケース

前回インタビュー時、下川は正社員として働いていた。当時、父親は「おまえの人生だから自分で決めなさい」「手に職をもちなさい」、貯金も「自分の好きに使えばいい」など、彼女の自主性を尊重した言葉がけをしており、彼女自身も、仕事のことなど父親と話す機会が多くなったと語っていた。母親は「ちゃんとした正社員になって地道に働け」と正規雇用で就職した下川の働きかたには賛成していた。また男性とのつきあいかたについての会話などもあった。

現在下川はなかなか仕事が見つからず家事手伝いをしており、本人は「ニート」と称するが、正規雇用で働いていたことと比べ両親との関係についての語りには変化がみられる。

うちは何かを言うと全部反対されて、理解者がいないんですよ。私が「これをやりたい」っていても、「おまえはこうでこうでこうだから」って、「これしか道はない」みたいにいわれるんで。親自身はそういうふう望んでいるかもしれませんが。

正規雇用で働いていたころのような本人の自主性を尊重した物言いではなく、下川自身の行動をかなり制限するような関係となっていることがみてとれる。そのため、彼女は声優・俳優養成所に通っていたことを親には話していない。特に母親による束縛の度合いが強まっており、インタビューに協力してくれた日についても次のように話す。

外も出られないし。今日はちゃんと行ってきましたよ。本当だったら日曜日はどこにも出かけられないんですよ。買い物につきあわされるんです。仕事は別格だけど。友だちと遊びに行くのに日曜日は出られなかったんです。

このような束縛は高校のときからあったと話す、正規雇用で働いていた2回目インタビュー時ではさほど強く語られてはいなかった。また彼女は何度もアルバイト募集で不採用となるが、一度採用の連絡を受けた弁当屋も、家から遠いという理由で母親に反対され辞退している。

彼女は現在、お金を貯めてひとり暮らしをしたいというが、携帯電話代や食事代などすべて「親のすねをかじっている状況」であり、ひとり暮らしへの一歩を踏みだせ

ずにいる。

このように働くこともできず、親に行動を制限され、家にいなければならない状況で、彼女自身の後ろめたさや「家のことやらなきゃ」という責任感と同時に、「家にいるからダメなんだ」という焦りとの板挟みが、さらに彼女を苦しめているとも捉えられる。親との葛藤を含む相互依存的な関係のなかに滞留せざるをえない状況にあるのではないだろうか²³。

②浜野美帆のケース

浜野の家は、母親が体調がすぐれず仕事をしていないために、以前は生活保護を受給していたが、弟が社会人として働きだしたため、現在は受給していない。彼女は家計負担として収入の全額を入れ、一家の「稼ぎ手」としての役割を担ってきたが、不安定な働きかたになってからは収入も安定せず「10万円はあたりまえ」と思っている家計への繰り入れがうまくいかなくなっている。こうした状況が、家族間葛藤を引き起こしている。そのことで浜野は、自由になるお金が制限されていると不満を抱くようになっていく。浜野は母親にこう言われている。

「お前の悪い癖は、急に嫌だと思ったらすぐに辞めて、それで仕事がないっていう状態。辞めてから時間かかるし。辞めるんだったら、次の仕事を探してから仕事を辞めて。次のことを考えて。給料が途切れると困る」って。

また、すでに離家している姉にたいしても「恐いよ、お姉ちゃんとかは。今週日曜日に帰ってくるのね。どこに逃げようかなって思って。もうグチグチ言われるから。自分がぐうたらだから。ニートだから」と、つらさを感じている。もともと経済的に苦しかった家庭の状況に彼女の不安定な働きかたが重なって、「お金のこと言われたくないから、家を出たい」というように、彼女の生活は自分自身の居場所をみつけられないほど不安定なものとなっている。

③若林理恵のケース

若林は短大卒業後アルバイトをしていたが、辞めてからは「親に頼まれて」家事手伝いをしている。以前から母親に言われて家事はおこなっていたが、卒業後はさらに祖母の介護も加わった。彼女の毎日は実家と祖母の家を往復する生活だが、そんな毎日にたいして彼女はこう話す。

むこうで家事やって、こっちの実家で家事やって、(中略)実家には正直、ほとんど家事と寝に帰っているみたいな。ちよっ

と昼寝しに帰ってるみたいな感じですね。だからもうけっこうつらいつすね。

(祖母の介護をするようになったことは) 当分私がどこにも行けないようにする枷にはめられたっていう感じでした。妹がいるときは楽だったんですよ。(中略) 週に一、二、三回顔を出しにいけばいいだけだったし。妹が家出してから毎日(祖母の家に行くことになった)。

このように、彼女は現在の生活に不満を抱いていることがみてとれる。そうしたなかで、若林の不満の矛先は母親にむかう。そして若林は自分と母親の関係について次のように話す。

ママは私が(家事を)やってあたりまえ。(中略)(母親も家事は)できますよ。私がいなきゃやりますもん。私がいなきゃ、やんなきゃなんないからやりますよ。やれないことはないんですよ。ただ私に甘えてるだけなんですよ。

2回目調査でも、母親が自分でできる家事を若林に負担させている状況が語られていたが、今回も母親が若林に家事を頼りきっている傾向は変わっていない。また、前回は「最近束縛が強くて」と母親による行動の干渉についての言及があったが、今回も行動の制限とうけとれる発言がある。

屈辱だと思いますよ、遊びにいけないうって。高校に入って遊びにいきたいっていう渴望が増えて、大学ですらに増えましたからね。それがあたりまえだってみんな言うんですけど、うちじゃあたりまえにならない。何でも我慢しなきゃならない。物をもらう代わりに自分の願望を80パーセントから70%は抑えなきゃならない。それが現状ですね。

「(ひとりでいられる部屋は) ないです。常に親から見えます。そこでぴしゃりと寸断できない。」

「親は女の子らしい服装にしる、と。冗談じゃねえやって(笑)。」

「(外には) 黙って行かないと、都合が悪いと『駄目だよその日は』とか言われて。」

このように母親は若林の普段の行動、服装についても、家の中や外を問わず監視、干渉していることがうかがわれる。こうした母親の監視、干渉についてはそうした依存を通じた支配の背景として、母親が19歳のときに若林を妊娠したこと、病弱であること、離婚歴があることや高校を中退した可能性があること、若林の妹も母親のし

ばりにたいする苦悩から家出をしてシェルターに保護されていることなどがあるのかもしれない。そんな母親にたいして若林は「いつ死んでくれるのかなって思いだすようになってきた」「自立しようと思ってるんだけど親がさせてくれない」と2回目調査時にいっていたが、今回も「こっちはがんばってるのに怒られるからだんだんイライラしてくるんですよ」「親にたいする不満とか、恨みじゃないけど、そういうふつふつとしたものがあります。一時期マジ殺してやろうと思いましたがもん」という。一方、次のようにも話している。

(親は) 精神的にかわいそうな人。私がいなければ自分を保てない人、何かに依存しなきゃ保てない人、かわいそうな人です。(中略) 母親の場合は私や第三者を困らせるのが依存のしかただから困りますね。

(五年後、十年後の理想は) 親からトンヅラしていること。ぜったい独立したら親との連絡いっさいとりません。困ったら自分でなんとかする、だから困るようなことがないように先をみすえてなんとかしていきたいし。親も私がいれば頼っちゃうだろうし。

ここからは、親が生活していくのに自分の存在が必要であることを若林自身が認識していることがわかる。

これまでに見たように、母親が若林に頼りきっている状態は以前から変化がなく、日常の行動を監視、干渉していることがうかがえる。彼女自身はそうした監視、干渉に強いストレスを感じており、親からの独立を強く望んでいる。しかし一方で、母親には「私がいなければ」と、母親からの依存の関係のなかに自分自身の存在の必要性も認識しており、現実にはそこから抜け出そうと行動することができず親元での生活を続けることとなっている。こうした状況から、若林と彼女の母親が共依存的関係にあると読みとることができるのではないだろうか。

3) 小括

以上より、これまでの調査と同様、フリーターの多くは家計を支える「稼ぎ手」の一人として位置づいている状況が指摘できる。そうした傾向は母子家庭、生活保護受給家庭に強くみられ、家庭の状況と働きかたが密接な関係をもっていることが指摘できる。

また、彼ら彼女らの不安定な働きかたと親子関係が互いに影響をもたらしているということも指摘できる。つまり、不安定な働きかたによって下川が相互依存的な関係をつくったり、浜野が親子間葛藤を深刻にした

り、若林のように共依存的な葛藤が働きに出ることをはばみ、家族関係をさらに不安定なものにするというようなかたちでたち現れたりしているのだ。

5. 地元つながりとフリーター生活

本調査時、フリーターだった若者たちの全員の口から、今でも出身高校の同級生たちとのつきあいが続いている話が聞けた。先述したように彼ら彼女らは、就業、失業、無業の状態を行き来している。安定しない生活を送るうえで、地元で形成され維持されてきたこのネットワークは、どのような役割を果たしているのだろうか。

すでに2回目調査時において、若者たちにとってこのネットワークが、日々の生活を送るうえで重要な位置を占めていたことが明らかになっている。とりわけ、追いつめられながら離職に至った経験をもつ若者にとって、それらの困難を乗り越えていくうえで重要な役割を果たしていた²⁴。

本節では、4名の若者たちに注目し、高卒3年目に浮かびあがった不安定な生活状況と彼女たちがもっている関係性との連関を整理していねいに描きだしたい²⁵。下川は「アニメ声優」という趣味を、浜野、庄山、西澤の3人は「ビジュアル系バンドのライブ通い」（以下「ライブ」）という趣味をとおして形成された高校時代からの関係を維持している。

1) 「アニメ声優」つながり—下川彩乃のケース

下川は、高校時代から「アニメ声優」という趣味を通じた関係を維持している。2回目調査時には、アニメや声優の話題で盛りあがる永原香織と内田玲奈とのあいだに「腐れ縁」「いつも一緒」の親密な関係をつくりながら²⁶、アニメつながりの若林、同じクラスで声優を同じくめざしている竹内、バレエ部で一緒だった高橋有香とのあいだにゆるやかな関係をもっていた。さらに本調査時には、ちょうど成人式を経験していたこともあり、アニメつながりの山路さとみや磯知明、北沢直樹などの同級生たちを飲み会に誘うようなつきあいがさらに広くあることがわかった。しかし、正規雇用を離職後、断続的にアルバイトをし、その後およそ9ヶ月間無業状態にある彼女にとって、飲み会など何かあれば声をかけられる、このようなつながりのなかでも、頻繁に連絡を取りあっている内田と、声優をめざしている竹内の二人とのつきあいが、とりわけ重要な位置を占めている様子だった²⁷。

①声優になるための「資源」になっている竹内の存在

「だって、彩乃（下川）とか有香ちゃん（高橋）とかはぜんぜん（学校外で）遊んだことなくって、学校だけのつきあいだったから」と竹内は、下川とはよく遊ぶ間柄ではなかったことを2回目調査時に語っていた。しかし彼女たちは、本調査時に一緒にインタビューに現れるような関係を、高校卒業後断続的に維持していた²⁸。ふたりをつないでいるのは、「声優になりたい」という共通の目標である。2回目調査時²⁹に、すでに竹内は下川を声優をめざす具体的な準備・活動に誘っていた。下川も、そういう竹内の情報を頼っている様子うかがわれた。

メールとかで、専門学校の体験入学があるから（予定が）空いていたら一緒に行けるって（下川が）いっていたんですけど、やっぱり忙しいみたいで断られて。そのあと「オーディションがあるけどどう？」ってメールはしてるんですけど。（竹内）

竹内さんいるじゃないですか。あの子も声優めざしているんですよ。だからあの子がどういう答えをだすのかなんですよ。気になるんですよ。ライバル心なのかな。（下川）

下川は、竹内と一緒に俳優・声優養成所に通っていた時期があった。これも竹内が調べたところを、一緒に見学して決めた。しかしその後はなかなかアルバイトがみつからなかったこともあり、経済的に通いつづけられなくなり休止している³⁰。

このように、下川にとって竹内との関係は、彼女が高校卒業時に語っていた「声優になる」という目標に一步ずつ近づくために必要な「情報」を入手できる唯一の資源になっていた。下川がその実現にむけて選択した、「お金がないから、正社員になって、せいぜい2、3年働いてお金を貯めて、養成所に」といった高校卒業時の進路・ビジョンは、わずか1年未満で離職せざるをえない状況のなかで（2節）、大きな修正を余儀なくされた。そのときに、高卒後フリーター生活を送りながら、声優になるために情報を集め、活動をしている竹内の存在は、身近な「モデル」であった。

しかしながら、このふたりの関係は本調査時点では、その厳しい道を励まし支えあいながら一緒に歩いていくような関係にはみえなかった³¹。下川は、自分は声優になれるのかという不安、揺れを語るなかで、2回目調査と本調査での将来展望について、以下のような変化をみせている。

なれる自信がないんです。こんなだみ声でいいのか、とか。(中略) もしよければ歳をとっててもやりたいです、声優。[2003年10月記録]

[いま心配なこと、不安なことはある?] 声優のことかな。不安はかかえてもしかたがないけど。(中略) [5年後10年後は何してる?] 何もしていないから、希望がだんだん薄れてきたんですね。(中略) 声優にかんしてもちゃんとした踏ん切りを(つけないとならない)。[2005年11月記録]

2回目調査時、彼女は職場を1年弱のうちに3回異動させられており、人手不足の製造工場での働かされかたに「体がついていかない」状況のなか、「今、このつらさを乗り越えれば、声優もつらくても、今のことを思い出して、こんなつらさ屁でもないって乗り越えられるから」と前向きだった。しかし、本調査時には、無業状態が長期化するなかで焦りと諦念とがみられた。そういう職場での状況や無業状態(4節でみてきた親子間葛藤も含め)については下川は竹内に相談している様子はない。

②下川の生活の不安定さ

「仕事面も、人間関係の面も、ホントぼろぼろだったんで」と約10ヶ月で離職した惣菜等調理販売会社での就労は、下川にとって、その後の職業世界を渡っていくうえでの自信を得られる経験とはならなかった。

お弁当屋さんのこともあったんで、恐怖になっているんですよ。[どんなことが?]「急遽これやって」ってなると、対処ができないんですよ。テンパるんです。それで、えーどうしようどうしようといっているうちに、店長に怒られるんですよ。(中略) たとえ経験不足でも(そう怒られると)、だんだんと(落ち込む)。そういうのが怖いんですよ。

離職後、断続的に短期的な派遣のアルバイトを経験したが、その後なかなか仕事が決まらないまま8ヶ月間無業状態で過ごしていた(2節)。こうした不安定な生活状況を両親に扶養されて乗りきっていたが、その反面彼女の生活は、両親に束縛されて窮屈なものになっているようだった(4節)。それに加えて、父親の定年退職にあわせて引っ越しの計画も出していた(2節)。両親に頼らざるをえない生活を送る下川にとって、そのことが近い将来にたいする不安を少なからず与えていた。その一つは、今住んでいる地元を離れてしまうことによる夢(声優)の道が遠のいてしまうことである。また、「私、ひとりっ子なんで、誰にも頼る人がいないんですよ」と

話し、将来ひとりで生きていかなくてはならないことにも不安を覚えている様子であった³²。

③情緒的な支えになっている内田の存在

こうしたなか下川にとって、自分がかかえる困難さや将来への不安を理解してくれる存在は内田だった。お金のかかるイベント通いをしなくなった仲間がいるなか、二人で出かけている。仕事で忙しい内田さんに代わって、下川が携帯電話のサイトからアニメ声優の出演するゲームのイベントのチケットを予約する。そして下川は両親にお金を借りてまでして、2ヶ月に一度はイベント通いをするほどに、趣味の世界をふたりで生きていた。

ネオロマンス(アニメゲームの一ジャンル)の岸さん(声優)とか、会いに走ったんだよね。(中略) 朝7時くらいに会って(内田と待ち合わせて)、6時起きとかで。もう朝からテンション上げて。(中略) でも行きすぎ。金かけすぎだよー。仕事しろよって感じ。

彼女たちは、高卒後同じ会社に一緒に就職しており、「バイトのおばちゃん、うるさいとか、嫌だー、とかいいますね。下川は下川で大変そうです」(内田)と職場でのしんどさを聴きあう関係でもあった³³。本調査時、下川が辞めた経緯について語っていたときに、その場にいた内田は彼女に、「でも辞められるってのがすごい」と好意的な言葉をかけていた。

ふたりはお互いの家庭環境・親子関係についてよく理解している。下川はしばしば内田家を訪れていた。「癒されないからね、うちにいても。むしろ友だちんところにいたほうがいい」。内田の父親が高齢で、母親が重い病気を患っていること、さらに生活保護世帯ではあるが、笑いが絶えない家庭であることを下川は語る。他方、内田も、「(家を)出たいです。もうストレスたまるし」という下川の言葉に、「そう、彩乃(の家)はね」と下川家の事情を理解している様子だった。ふたりは、下川:「限りなく一緒にいるだろうな」、内田:「だね」と言い合えるほどに親密な友人関係を形成していた。下川は、内田との関係に支えられながら、ストレスフルな日々を乗り切っている。

2)「ライブ」つながり

西澤、庄山そして浜野は、高校1年のとき同じクラスだった。西澤と浜野は6人グループで行動していたが、庄山は最初のころ、ひとりで教室にいることが多かったそう。そんな庄山を、グループの一人が気にかけて、一

緒に行動するようになった。そして、中学のころからインディーズバンドのライブに通っていた西澤³⁴を中心に、彼女たちの「ライブ」つながりがつくられていった。庄山がバンド好きだとわかった西澤は、あるバンドのライブに彼女を誘った。それがきっかけとなり庄山はライブ通いにはまりだしたという。そしてその後、彼女たち二人が当時気に入っていたバンドの歌を、西野は浜野に聴かせたことをきっかけに、浜野も一緒にライブ通いをするようになった³⁵。

高校を卒業して3人は別々の進路に進んだ。その職業的世界のなかでそれぞれに困難な状況に直面していた³⁶。3人にとって、「ライブ」という「場」は、日々すり減らしている心身をリフレッシュし、仕事を乗りきるための支えとなる生きがいであるのみならず、「人間恐怖症になった」（西澤）と口にするほどにひどい就業体験から回復していく「場」になっていた。そして、その「場」を土台にして、3人のあいだ、そしてとくに庄山と西澤との関係、浜野と西澤とのあいだに、生きがたさを支えあう親密性が生まれていた³⁷。

本調査時、彼女たちはそれぞれに、夢中になって通いつめていたライブから足が遠のいている。庄山によれば、西澤と一緒に「全然売れていないバンド」の「最初からいるファン」になって、「みんなでいることが楽しかった」が、そのバンドが解散してしまったのだそうだ。さらに西澤によれば、今のビジュアル系バンドが10代半ばで「みんな年下」であるため、「萎えて」しまったことも頻繁には通わなくなった理由だという。また、浜野へのインタビューでも、ライブについては話題にもならなかった。このように「ライブ」という「場」へのスタンスは変化したが、3人の関係は、後述するようなライブで知り合った者ともつながりながら、「場」を離れても維持されている。

①浜野美帆のケース—安心できる居場所としての西澤の家庭

浜野は、この「ライブ」つながりだけでなく、B高校時代の女子を中心にした交友関係（吉川、岸田）を現在もゆるやかに続けている。しかし、どの者よりも西澤の存在が彼女にとって大きい。西澤本人だけでなく、西澤の母親と妹も、浜野にとって支えになっている。休日やアルバイトをサボっているとき、彼女は自宅ではなく、西澤家にいることが多いと語っている。そこは、彼女にとって息苦しさを感じる自宅を離れられる居場所になっている。「うちが家を出たとき、お世話になる家だから。第二の家」。彼女の言葉ではほぼ毎日西澤と会っている

という。「家族ぐるみで仲良くしている」というくらいに、彼女は西澤家に「お世話になっている」。西澤がいなくても家で食事をごちそうになったり、母親からはお菓子屋のアルバイトの紹介を受けている。彼女もまた、西澤の妹の髪を染めたりするなどのお返しもしている。困ったときに相談できる人はという質問に、彼女は西澤と西澤の母親の名前を挙げた。精神的にストレスをかかえて、仕事を休むようになったことで後ろめたさを感じ、それをまた非難されることで、何も相談できない関係になっている自分の母親や姉と違い、西澤の母親には相談できると語る。

②西澤菜穂子のケース

②-1 交友関係の変容：浜野との関係

西澤にとって、浜野は高校1年のとき同じクラスで一緒に行動していたが、卒業後の関係ほどには仲良くなかったそうだ。卒業してからお互いの自宅がすぐ近くだったということもあり、浜野が家に来るようになって仲良くなりはじめたという。「あたしがいないのにずっと家にいてみたりとかして。（中略）朝起きたら、いたりとか」と浜野が部屋にいることにすっかり慣れた様子だった。ライブと一緒に出かけていた関係は、お互いにとって、〈バイト先を探し、一緒に働ける〉資源になっていた。

「派遣の仕事と一緒にいったことがある。」（浜野）

「浜野が、そのパチンコ屋で働きはじめたっていうんで、私もやってみるつって、でやってみただけど。」（西澤）

「西澤が漫画喫茶で働いているから、そこが空くから（求人を出す）夜でもどっちでもいいから、そこにいれて。〔一緒にシフトになれる？〕できる。」（浜野）

西澤はキャバクラなど水商売のことを浜野に話していた。

「西澤さんはキャバクラでバイトしていなかった？」うんうん、してた。いろんなことやっていたから覚えていない。うちの口からだったらいえない。（浜野）

また浜野がそういう仕事に関心を示したときに、西澤は「一時期浜野もお金がなすすぎて、そういう世界にこうとしていたことがあって。『友だちだからいうけど、絶対やめろ』って。『傷つくだけだからやめろ』と忠告もしている。このようにふたりは互いに思いあうつきあいをしている。

②-2 交友関係の危うさ：ライブつながりの友人との関係

正規雇用での就職先を離職した西澤は、毎月決まった額の収入がなくなり、自由に使えるお金が無かった時期に、庄山の知り合いだったライブつながりの友人におごってもらいながら遊んだり、その友人とラブホテルを泊まり歩いたりする経験をした。その友人の情報・仲介によって、庄山とともに水商売の世界に足を踏み入れた。そしてこうした仕事によって、金銭感覚の麻痺と、うつ病にかかるほどのストレスフルな職業生活を体験することとなった。

やっぱり親もうすうす気づいていたと思うんですね。なんか、気づいてほしいという気持ちもあったんだと思うんですけど。つらすぎて。

すべてを親に黙っていることへの良心の呵責と気づいてほしいという思い。そして、この仕事にたいする負い目。西澤の家庭はそれほど経済的に困窮していたわけではなかった。しかし、ライブという彼女が生き直すきっかけになった「場」が、今度はこうした水商売の仕事に導くきっかけをあたえ、西澤にとって容易には抜け出せない新たな困難さをつくりだしていた。

③庄山真紀のケース—支えあうことの難しさ：西澤との関係

庄山は、西澤とともに上野のクラブで働いたことをきっかけに、キャバクラなどの水商売を経験していた。高校卒業時に、学費の工面ができず調理師学校進学ができなかったという経済的条件は、本調査時においてもまったく解消されていなかった。卒業後、できるだけ稼ごうとアルバイトを掛け持ちしていたとき、ライブでたまたま知り合い「友だちみたいに」なった女の子と西澤の二人に「ホントに稼げるからお前来たか」と水商売に誘われる。こうしたかたちで〈高い時給で稼げる場を紹介してもらい、一緒に働く〉機会をこの交友関係から得たものの、彼女自身はここでの水商売にたいして違和感を持ち続けていた。この仕事をしてきたあいだ、日々の違法労働の「ひどさ」や「やばさ」を西澤と語りあっていたそうだ。肉体的にも精神的にもきつい仕事のなか、西澤とふたり互いに支えあってやり過ぎてきた。「この一年間にかんしては、キレイさっぱり消し去りたい過去ですね」と、その後西澤より早く、彼女のいう「普通」のアルバイト（前から働いている弁当屋）中心の生活に戻った。

庄山は、体調の悪い母親との生活を彼女ひとりで支え

ている。その苦勞と親へ氣遣いについて、どれだけ彼女の胸中を西澤に吐露しているのかは語られていない。しかしながら、庄山の母親が交通事故に遭ったときに、西澤は庄山から金銭面の相談を受けたため、水商売を紹介している。

庄山の母親が事故っちゃって、で、お金が必要だっていうから、(水商売に)呼んで、ここでしょうがないよって。で、一緒にやっていたんだけど。(西澤)

しかし庄山は、事故後の法律的な事後処理がうまく進んでいないことを、誰にも相談できず孤軍奮闘している様子だった(4節)。庄山を氣遣う西澤の支えは、その後の対処にたいして具体的な解決策と一緒に考え、しかるべく支援をみつけだすには弱かった。家庭にふりかかる困難さを彼女は一身に引き受けて生きていたが、こうした生活状況をなかなか改善していけていなかった³⁸。

3) 小括

以上4つのケースから、単純な一般化は避けつつ、得られた知見を整理しよう。

①フリーター生活を支えあう関係としての地元つながりイ)〈就業・離職・無業〉をくり返す職業的移行を支える関係性

高校卒業後3年目となった本調査時においては、不安定な職業生活を送る若者たちのなかに、正規雇用時の就労経験がある種のトラウマとなっており、そのことで求職活動を躊躇する者がいた。また、その後の求職活動の困難さ(面接で落とされてばかりいる、年齢や実務経験や資格の有無の条件ではじかれるなど)や、非正規雇用の就業生活の不安定さのなかで、働くことにたいする自信を失いつつある者がいた。そこには、ひどい働かされかたを経験しているために、自己防衛として慎重に仕事を探す姿勢や、入って知ることとなった劣悪な労働条件のなかでふたたび自分が壊れるまで働くことを拒む意識が少なからず働いている。そして、結果的に短い期間に仕事を変えざるをえない状況のもと、そのつど新しい仕事を覚えなくてはならないことや、職場の人間関係になじむ努力の背後に、ストレスを多くかかざるをえない若者がいる。こうした若者たちにとって、地元つながりの仲間たちは、不安を紛らわしてくれ、愚痴を聴いてくれ、ときには非正規雇用ながら仕事を紹介しあう重要な存在になっていると考えられる。

ロ) 家族生活上の困難を支えあう関係性

長期にわたる不安定な職業的移行は、高校卒業後につくり変えられた家族内でのポジションをさらに変容させる契機を生む。とりわけ正社員からフリーターへ移行する若者において、親子間葛藤に顕著なかたちで、その親との関係に変容が生じている。正規・非正規という就業形態の別を問わず、生活保護世帯を含めた経済的困難をかかえている家族の場合、私たちがみた若者たちは一貫して、就労期間中家計を支えている。就業・失業・無業の行き来は、収入の寡多および無収入状態の変動を生じさせ、家計負担をめぐる苦勞を若者たちに与えている。こうしたフリーター生活の不安定さのなかで、「このままではよくない」と経済的「自立」を強く意識しながらも、将来展望を描く余裕すらなかなかない。こうした見通しのない生活において、友人と一緒にいてくれる、あるいはなかなか会えなくても地元でがんばっていることが想像できるという安心感を、地元つながりのネットワークは与えているのではないか。この機能はますます強まっているように思われる。

② 地元つながりの関係構造

職業的移行および家族生活上の困難を支えあう関係として彼ら彼女らにとって重要な位置を占める地元つながりは、どのような関係構造をもっているのだろうか。これにかんしては今後の調査において、よりていねいなネットワーク分析をおこなう必要がある。やや未整理な部分があるが、本調査分析で浮かびあがった視点を提示しておく(終章4節も参照)。

イ) ネットワークの変容

高校卒業後3年間を追っていくと、高校時代のネットワークがそのままの性質で維持されてきたわけではないことがわかる。本調査において、このネットワークには以下の三つの変容の様子が確認されている。一つ目は、〈学校〉という空間から〈地元〉という空間へと若者たちの主な生活空間がシフトされたことによる変容である。お互いの自宅が近いということや、同じ目標にむけた活動を共有するなど卒業後の生活環境が変わることを契機に、高校時代はそれほど親しくはなかった者たちどうしのむすびつきが強くなっていた。二つ目は、〈学校〉という場で形成されていた関係自体の変容。高校3年間を学校空間で過ごす若者たちの高校生活は、学校内での居場所としてそれぞれがもつ私的グループの関係性に多くの影響を受けている。いいかえれば、このグループ内のメンバー間での力学が、在学中ははたらいている。し

かし、学校を舞台にしたこうした力学に影響を受けていた関係性は、高校を卒業し、若者たちがその学校という場を失うことによって変わりうる。本調査時に聞かれた「(卒業したから)もういいことがいえる」という吉川の言葉には、高校時代の関係が、卒業することをきっかけに地元でもともに生きていく「市民」としての水平的な関係性へとあらたにつくりかえられる萌芽がみてとれる³⁹。三つ目は、若者たちがこうしたネットワークのなかに、不安定な生活を支えあっている親密な関係を(一対一関係で)つくっていることである。そしてこの関係は、おそらく学校生活段階ではみえてこなかったような、家庭生活も含めたポスト学校のお互いの生活状況や経済的な困難さが、クリアにみえてくることによって、より深くお互いを理解し受け入れる関係性(家族を含んだ親密性)となっていく⁴⁰。

ロ) ネットワークの重層性

イ)の二点目にかかわって、本調査では、何名かのインタビューを二人の若者が同席するかたちでおこなっている。かならずしも親友であるとお互いが表明するような関係でなくても、ゆるやかなネットワーク内にある若者どうしでインタビューに応じてくれるといったときもあった(下川と竹内、浜野と吉川など)。これらのインタビューを含め分析してみると、一対一の相互に支えあっている親密な関係がコアになってゆるやかなネットワークが形成されているといった単純な図式ではかならずしもなかった。たとえば、浜野にとっては西澤が支えになっていたが、西澤にとっては庄山が一番困難なときに支えてくれた存在として認識されており、庄山も西澤にもっとも厚い信頼を寄せているといったずれがみられた。下川は内田といつまでも一緒だと語り、内田もまたそれに応えるかたちで親友関係を表明していたが、下川が息苦しさを感じている母親との関係については、実は同様の葛藤をかかえている若林と会って語り合っているということが、若林のインタビューで浮かびあがった⁴¹。ネットワーク内での若者たちの生きられかたをみていくためには、こうした個々の若者の関係にたいする意味づけが異なっていることに注目しなければならない⁴²。

ハ) ネットワーク機能の危うさ・弱さ

浜野が、西澤の家族に支えられるなかで、西澤の母親からお菓子屋のアルバイトを紹介されるなど、ネットワークが職業的移行上のサポートになっている側面がみられた。しかし、西澤と庄山のケースにみられるように、特に女性の場合、「キャバクラ」などの水商売を選択す

る道もまた容易に開かれてしまう危うさがある。その背景には、彼女たちのネットワークがもつ「仕事探し」にかんする資源の貧しさがある。自分ももつ狭いネットワークを頼ってアクセスしたこうした仕事彼女たちの「まっとうに生きたい」といった欲求とのあいだに深い葛藤や傷をもたらし、この就業経験の「物語」をつくり直すためのしんどい作業を与えてしまっていた。

庄山の家庭にみられるような困難さは、とうてい若者自身の自助努力だけで解決できるものではない。しかし、彼女は親友に精神的に支えられることで、引き受けざるをえない困難さを背負いながら日々を生きぬいていた。彼女たちが形成しているネットワークは、こうした自立以前の根本的な困難さを解決していくための資源・道具として機能するには脆弱である⁴³。

6. まとめ ～将来展望の変容

ここでフリーターとして紹介した11名は、厳しい労働条件や、職場での人間関係づくりの困難に直面しながらも、一家の「稼ぎ手」として家計を支えなければならないような家庭の経済的背景から、また自分自身の生活を成り立たせなければならないことから、ときにはアルバイトを掛け持ちしたりしながら働きつづけてきた。今回インタビューに協力してくれた若者は、高卒直後からフリーターとなった者のほか、正社員から離脱してフリーターとなった者、進学先を出てからフリーターとなった者がいる。いずれも最初からフリーターを望んでいたわけではなく、正規雇用就職や進学を困難なものとする背景を背負いながら、フリーターへと参入してきた。このようにフリーターがあらゆる層からこぼれ落ちた者の受け皿となっていることは、前回調査でもみられたことである。

本調査時、フリーターを続けてきた、または新たにフリーターになった者のなかで、資金を貯めて進学した者、正規雇用で就職した者は一人もいなかった（週1回の声優・俳優養成所への入所が2名と医療事務資格の取得が1名のみ）。彼ら彼女らはこの困難な状況のなかで心身ともに深く傷ついたり、何度も面接に落ちるなどの経験をしながら、失業・無業をくり返しつつも、いくつもの仕事をこなしてきた。この多くは彼ら彼女らの予想外の結果としての離職であった。そのあいだ、高卒時にもっていた地元のネットワークとはまた違った人間的つながりが、彼ら彼女らを支えていた面もみられた。一方では、不安定な働きかたが、親子間葛藤を複雑にするなど親子関係に少なからず影響し、また相互的な依存または共依

存的な関係などが、彼ら彼女らの労働への選択を縛りつけていた面もみられた。高校を卒業してから数年経ち、学校という場とのつながりもなくなったということは、公的なサポートを受ける場をひとつ失ったということでもある。労働市場のなかで個人の努力によって「一人前」になっていくことが課せられている彼ら彼女らの現状は、家庭のもつ経済的な資本の寡多に大きく拠っている。そのなかで不利な若者たちは、地元での心許ないつながりに頼りながらなんとか不安定な労働市場に留まっているが、そのつながりさえも経済的な資本の少ない者どうしでの支えあいになっている状況である。また若者たちのなかには積極的にフリーターの世界を渡り歩いている者たちがみられたが、何かに裏打ちされた評価ではなく、個人的に体感した「自信」を楯にしていた。

このような働きかたのなかで、彼ら彼女らの将来への展望はどのように変化していったのだろうか。おおまかな流れをケースから導きだしてみよう。

田辺は5年後について「生きてる（笑）。ぜんぜんわかんない」と答えるが、前述のように仕事にたいする興味は強くもつようになった。以前はアルバイトで資金を貯めて介護専門学校へ進学することも考えていたが、そのことについて次のように語る。

勉強ばかりできたって、仕事ができなかったら意味ないじゃないですか。だから私は仕事のなかでいろいろ勉強してきたいなと思って。学校にいったら勉強するのも楽しいし、否定はしませんが、私はそっちのタイプを選ぶっていう。

私はホントに仕事が好きなんだと思うんですけど。だからぜんぜん、これひとつで留まる気はなくて。

宮本も5年後については「あまり変わってないか、ガラッと変わってるか、どっちか」と具体的にはみえていない。しかし、その見通しは逃避的なものやあきらめからくるものではない。

自分でやってみて納得することが多い。なんかかっこ悪くても、やりたいことやり続けててもいいんじゃない？そうじゃないと自分の才能を活かきれないような気がする。

この2名は数々の仕事を積極的に渡ろうとしている。労働条件や職場環境はかならずしもいいとはいえない仕事が多く、離職を重ねつづける働きかたもとても不安定なものにみえるかもしれない。また彼ら彼女らの職歴で身につけたものも、専門的知識や技能、資格といったも

のに裏打ちされたものではなく、「やっつけ」であった、それこそ不安定な「自信」である。しかし彼女らは、自分自身にとっての労働の意味を感じとり、その仕事における自分の居場所というものをみだしている。

一方、本調査に協力してくれた者のなかで唯一、高卒後、美容師という「やりたいこと」に正社員として就職した浜野は次のようにいう。

今は早く主婦になりたいなって。専業主婦になってダラダラとした生活を送りたい。

社員になってもいいけど、そこまでやっても。何かにこだわってるんだよ。ふつう社会人って土日休みでしょ。でもうちは普通の日に休みたいの。朝起きれないし。

彼女は、母親の紹介で化粧品の研修に行くなど、メイク業界への夢ももち続けているが、メイク学校の学費支払いが困難なため、その夢は「30代とか」と先送りしている。現在は将来について「何も考えたくない。お金を用意する余裕もない」と語っており、展望することすら困難になっている。そして、自分が働いていたところの正社員の過酷な働きかたをみて、正社員への期待も消え、また何度も何度も職を変えるなかでそのたびに厳しい状況に追い込まれることから、労働への期待すらもち続けることが困難となり、逃避的な気持ちから「専業主婦」願望を語るようになっていた。高卒後からずっと弁当屋に勤めてきた庄山も、2回目調査時は「とりあえず私のしたいことはしてる。(料理を)作れるっていう。別に一から全部作ってるわけじゃないけど、料理を作れるから、それで満足してるから、今の仕事が続いても続けてられると思う」と話していたにもかかわらず、本調査では将来は「あいかわらずぶらぶらバイトしてる」「お嫁さんになれたらいいかな」とその展望を変えている。この「専業主婦」願望の強化は、フリーターとして離職しつづけてきた吉川にも同様にみられた⁴⁴。

また、声優という「やりたいこと」を追いながらフリーターを続けていた竹内は2回目調査時に予定していた吹き替えのオーディションが立ち消え、「役者の道をめざすにあたって、今自分がどの辺にいるのかもわからない。そのために何をすべきかもまだわからない」という。

前は声優だけだったけど、今は何かのかたちで、演技とかにたずさわれたら。もちろんそれを仕事にできたらという部分は強くあるんですけど、でもどっかで趣味でもいいからやれたらいいなという、ある程度妥協している部分もあるし。

と声優から役者への道も考えるとともに、それを仕事とすることから一步引くことも視野に入れている。5年後の展望として「たぶん、あんまり変わってないな」と現在のフリーター生活から脱する見通しももてずにいる。竹内と一緒に養成所に通う下川は経済的困難から通学が困難になり休止した。そのうえ仕事もなかなかみつからず面接も何度も落ちた。これまでの過程で「疲れちゃって」「肩の荷をおろしすぎ」ている自分自身を「ニート」と称する状況で、将来は舞台に出ることや声優への夢、ハリウッドでダンスを習うという「はかない夢」をもちながらも、「このままでいいのかな」「ホントに大丈夫かな」という不安を抱き、「何もしてないから希望がだんだん薄れてきた」ともいう。また「ちゃんと踏ん切りを。5年後10年後ってヤバイじゃないですか」と夢を「あきらめる」ことも視野に入れている。

このように彼女らは予想外の結果としての離職をくり返すなかで、さまざまに将来展望を変容させ（または保持し）ながら生きている。アルバイトを積極的に渡り歩いていこうとする者たちもいれば、正規雇用就職だけではなく働くことへの期待をなくしていくなかで「専業主婦」願望を強めていく者たちもいる。これまでの夢をあきらめようと考えはじめた者たちもいれば、岡本のようにこれまでの展望どおり一歩ずつ夢へと進んでいく者もいる。そして竹内のように、独立を機に非正規就労でも一定の安定を求めようとする者もいる。

しかしいずれの道をたどるにしても、前述のとおり、ある一つのアルバイトで「自立」できるだけの収入を得ることは大変困難であり、現時点では「フリーター」という働きかたは、彼女らが最低限生活できるだけの条件を満たしていない。このような状況において、フリーターに滞留してしまう彼女らが安定して働き、生活できるだけの条件整備、とりわけアルバイトの最低賃金の引き上げ⁴⁵などの施策が急務である。

また同時に、庄山や竹内の経験から考えなければならないこともある。彼女らは、離職する理由を上司との人間関係の困難という私的な関係上のものとして認識していた。しかしながらその離職に至る過程において、こうした個別化・個人化への「抵抗」の萌芽ともみられる行動をとっている（終章4節も参照）。

庄山はマネージャーとの関係がこじれ、職場に行けない日々が続いたときに、このマネージャーらと話し合いの場をもった。

最終的にちょっと偉い奴と私の嫌いなマネージャーの三人で話して。全部これこれこうでって、相当に不満があるって話

して、マネージャーのダメなこと全部言ったんですよ。(中略)私の言ってること、まったくいつにも伝わってないし、茶々入ってるからいつにも伝わってないし。「いや僕らは庄山さんは疲れすぎだと思うんだよ」って(いうが)、おまえらのせいだよって思って。「働きすぎだよ」とか言って、「これからどうする」って(言われて)、「働く気あるんで」って(答えた)。(彼らは)「僕たちも改善します」みたいな。そのときに(庄山は)パートさんに負担をかけないでくれっていった。おばさんたちだし社員のやるような仕事押しつけて。(中略)その時はっきり言ったんです。「まずあなたのことが嫌いなんですけど、それは置いて、とりあえず仕事ができないことが不満なんで」って言って。「ちゃんと変わるなら私も変わるんで」って。

彼女はマネージャーへの個人的な不満だけを発しただけではない。パートへの超過負担など、このマネージャーの運営的な問題点についても指摘している。しかも職場の幹部が同席のうえで協議の場をもちえている。しかしその場ではマネージャー個人の問題として指摘することまでが限界だった。結果彼女の離職というかたちで終わっている。

竹内の場合も、オープニングスタッフで入った弁当屋のアルバイトを、同期の4名中3名がいつせいに辞めた。そのときに「本部の人を交えて話し合いになっちゃって、けっこうおおごとになっちゃって」と、その過程において協議の場をもつことができた。しかしながら彼女も離職という解決方法しかとらざるをえなかった。

宮本は映画チケットの「もぎり」のアルバイトで、上司に「たわけもの」と言われたとき、「たわけものじゃありません」と言い返した(3節)。このとき上司はこのように言い返す宮本の資質を評価するという、個人的な問題として収めてしまい、指導体制の問題というところにはいき着かなかった。

もし彼ら彼女らが、労働者の権利を十分に知りえており、また不当な働きかたを告発する術や、それを後押しする職場内外での人間関係やネットワークをもちえていたならば、これらの協議の場は違ったものになっていたかもしれない。個人的なものとして語られていた問題が構造的な問題に起因しているという認識のもと、その解決についても、彼ら彼女ら自身の離職という個人化された方法ではなく、非正規・正規雇用どちらも含めた労働条件・労働環境という構造的な面からの方法が探られる機会となった可能性も考えられる⁴⁶。

本調査は、フリーターが、これまで述べてきたような働きかたのなかでそれぞれの将来展望を変容させていく時点におけるものであった。今後彼ら彼女らが、フリー

ターという不安定なポジションのままいくつもの非正規就労を渡り歩くことで自立した生活を形成できるのか、専業主婦の道に進むことができるのか、夢を追いつづけるのかあきらめるのか、非正規就労であってもある仕事に定着して安定した生活を営めるのか、それともまた別の展望をみいだすのか、それぞれの道をめざしてどのように生きぬいていくのかをみていくことが課題となる。

注

- 1) 『人文学報』55-56頁参照。
- 2) 東京ではこの10年で、高卒求人数が激減し、若者の正規雇用率の大幅低下と非正規雇用率の大幅上昇などが起きている。芳澤拓也・上間陽子・渡辺大輔・宮島基・椎林美樹「統計から見た東京における若年労働市場の変容」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』20号、2003年)および宮島基「東京の若者たちの〈学校から仕事へ〉」(『18歳の今を生きぬく』第2章)を参照。
- 3) 執筆は、1・6節を渡辺・西村、2節を渡辺、3節を大岸、4節を遠藤、5節を西村が主に担当し、執筆者間で加筆・修正した。
- 4) 『18歳の今を生きぬく』91-96頁参照。
- 5) 『18歳の今を生きぬく』70頁参照。
- 6) 『人文学報』52-55、68-71頁、『18歳の今を生きぬく』56-58頁、242-247頁参照。
- 7) 『人文学報』52-53頁参照。
- 8) 『人文学報』50-52頁参照。
- 9) 彼女は1回目調査に協力してくれていた。ふたりは他の友人らも連れだってよく遊びまわり、泊まりあうような関係を築いている。『人文学報』50-52頁および『18歳の今を生きぬく』239-242頁参照。
- 10) 若林のこれまでの親子間葛藤などについては『人文学報』110-111頁、『18歳の今を生きぬく』147-151頁、短大での経験については本稿第3章4節を参照のこと。
- 11) 『18歳の今を生きぬく』120-123頁参照。
- 12) 日本経団連は、昨今の若者の短期間での離職、若年失業者の増加について、若者の「職業観・就業意欲の低下」を問題視し、「職業観・就労意識の醸成」を課題として挙げている。(社)日本経済団体連合会「若者の職業観・就労意識の形成・向上のために」2003年。
- 13) 一方、離婚した父親が経営する職場で就労できた吉川や、知人のついでで外国で生活できた宮本など、ある程度豊かな資源のなかで雇用・離職をくり返す者もい

- るが、紙幅の関係上および特に宮本の事情がはっきりしないことから、詳しい検討は今後の課題としたい。
- 14) ただしこのことは、現状のフリーターの賃金水準そのものについて、彼ら彼女らが満足している、あるいはそれで十分な暮らしができていることを意味するわけではない。ひとり暮らしを希望しながらもその経済的条件がなく、親などの葛藤をかかえながらの同居を余儀なくされていたり、家族らが不慮の事態にあったとき、ただちに経済的困難をかかえてしまう彼ら彼女らの経済的状況については、以下4節などにも詳しく紹介するとおりである。
 - 15) 今回の調査において、離職理由に賃金の問題が語られていなかった背景に、調査グループ側が事前に作成した調査項目に超過勤務以外の賃金にかんする項目が設定されていなかったことが挙げられる。しかしながら、端的な項目を作らなかったからこそ、彼ら彼女らが離職・失業・無職をくり返すなか、何にこだわっていたのかということがみえてきたことも事実であった。
 - 16) 熊沢誠『若者が働くときー「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』（ミネルヴァ書房、2006年）51頁。熊沢は、若手社員の離職率が高まる要因としての職場の人間関係について述べている。そのなかで、チームの業績というノルマを背負い、より上位の職制から常に厳しく査定されている、査定担当者たる上司を「中間管理職たる上司」と呼んでおり、この立場にある人間が、チームの目標業績の達成に思うように協力できない部下に日々つらく当たることになるのではないかと推測している。
 - 17) 『人文学報』41-42頁参照。
 - 18) スチュアート・タノック（訳 大石徹）『使い捨てられる若者たち』（岩波書店、2006年）34頁参照。
 - 19) 栗原弘昭「店舗24時間化や労働条件悪化で人がどんどん辞めている」（『週間エコノミスト』2006年7月25日号）参照。
 - 20) 『人文学報』55-56頁参照。
 - 21) 厚生労働省「平成15年度全国母子世帯等調査」によると、父母のいる家庭の平均所得は約589万円であるが、父子家庭の平均所得はその約66%の390万円、母子家庭は約36%の212万円弱である。
 - 22) 山田昌弘『パラサイトシングル時代』（ちくま新書、1999年）参照。
 - 23) この下川の状況は、山田が描きだした「パラサイトシングル」とは異質なものであると考えられるが、今後の調査もふまえて慎重な検討が必要となろう。
- 山田昌弘『パラサイトシングル時代』（前掲）。
- 24) 『人文学報』49-55頁、および竹石聖子『「地元」で生きる若者たち』（『18歳の今を生きぬく』第10章）参照。
 - 25) なお、この節でとりあげる若者たちはみな女性であるため、ジェンダーバイアスがある。しかしながら、非正規雇用が女性の労働現場で広がっているという若年労働市場の構造的な要因を考慮するならば、ここでとりあげる4名の女性の生きかたに焦点を当てるのは、一定の意義があると考えられる。なお、そのようなつながりとは別の、新たにアルバイト先などで知り合った人たちとの関係性を有している若者もいたが、そのうちの一人、田辺については終章注60参照。
 - 26) 『18歳の今を生きぬく』234-239、248-249頁参照。
 - 27) 高校時代からの3人組の一人の永原とは、3回目調査時点で、「永原さんとは最近連絡つながってないけど」と、普段から一緒に行動している様子はいかががえなかった〔2005年11月20日記録〕。
 - 28) 私たちのインタビューには、彼女たち2人（下川と竹内）に、高橋を加えた3人で、なるべく調整をつけてきてくれる。本調査は高橋は都合が悪く欠席した〔2005年11月20日記録〕。
 - 29) 下川〔2003年10月28日11時-12時記録〕、竹内〔2003年10月28日13時-14時記録〕。
 - 30) 「私は（養成所を）辞めたつもりはありません」と復学する意志を彼女は語っている。〔2005年11月20日記録〕。
 - 31) 3回目の調査時、インタビュアーの「声優じゃない道は考えないのか？」という質問に、「ない。まげることがダメなんです」と、下川は夢をあきらめないと答えた。そのときに同席していた竹内は彼女にたいして「でもさ、そこで妥協しなかったらいつまでもなれないままかもよ」と再考を促すことばを口にした。
 - 32) 下川のこのような不安要因として、両親と親戚との仲が悪いことも彼女は話している。両親と一緒に彼らの実家のある故郷に身を寄せても、将来的に親戚に頼れないだろうと彼女は感じている。
 - 33) 内田〔2004年1月24日記録〕。
 - 34) 西澤〔2004年2月26日記録〕。
 - 35) 庄山〔2004年7月21日記録〕。
 - 36) 『人文学報』52-55頁、竹石聖子「高校生にとって働くということー高卒後に地元で働く青年たちの生き方」（『発達』第108号、2006年10月、35-38-39頁参照）。

- 37) 「西澤さんにも相談したんですけど、もうホントにうつになっちゃったんですよ。そのとき、西澤さんが、(中略) そんなにすることはないんじゃない？って。(中略) (つきあって4年目)、けっこう長い深いつきあいはしてきたつもりだし、なんでも話すし、なんでも一緒にしてきたし、やっぱり一番の支えかな」(庄山〔2004年7月21日記録〕)、「(就業経験のことを思い出して極度の不安に襲われることが) 1、2週間は辞めてからずっと続いてて、(中略) 庄山がフリーターなんですよ。だからちよくちよくうちに遊びに来てくれて」(西澤〔2004年2月26日記録〕)、「(休みの日は) 寝てるか、友だちの家にいるか。(中略) やっぱり一緒にいると落ち着く。西澤菜穂子っていう。地元が一緒で。この子の影響で音楽の世界が広がった」(浜野〔2004年2月13日記録〕)。
- 38) このことにかかわって、インタビューから数ヶ月後、彼女はネットオークション上でライブのチケットを購入するために入金したが、その後その相手と連絡が取れなくなるという詐欺にあってしまった。その対処に困り、私たち調査メンバーの一人に電話で相談をもちかけた。私たちが「頼ることのできる」存在として彼女のネットワークに位置づきはじめています。
- 39) 浜野は、西澤たちの「ライブ」つながりだけでなく、岸田や吉川を含む高校3年時の4人グループの関係性ももっている。吉川への聴き取りのなかで、浜野との関係が卒業後変わったと次のように語っていた。「あるとき、浜野にね、ハブかれたの私が。(中略) で、高校辞めたからもうハブかれることもなくなって思って、私も今はもういいたいこととかいえるし」(吉川〔2006年3月8日記録〕)。
- 40) 特に、家庭に「居場所」がない若者にとって、家族ぐるみで支えてもらえることは、共依存的な親子関係の息苦しさ、無業状態やアルバイト経験から生じる不安感・ストレスを軽減するために有効に機能していた。
- 41) 「私の行動範囲すべて知ってたいのかな。まあある意味彩乃のお母さんと一緒ですよ。傍若無人なまでのわがママ女」(若林〔2006年3月6日記録〕)。
- 42) これは、調査方法にかんする私たちの今後の課題でもある。すなわち、複数でインタビューをする場合に、ネットワーク上の彼ら彼女らの関係性が可視化されるメリットがある反面、「語られない内容」(同席する友人がいるゆえに語らない誰かについてのことなど)が生じるバイアスをどう克服できるか、という点である。
- 43) なんらかの公的機関が、こういった層の若者たちのネットワークを捕捉しながら支援をしていくための政策が必要になっている。
- 44) この点にかんして、第5章3節参照。
- 45) 日本におけるパート・アルバイト賃金と正規雇用(フルタイム)賃金との格差は、国際的にみても極端に大きいという。乾彰夫『フリーター・ニート』概念の問題性(同編著『不安定を生きる若者たち』第I部第1章、大月書店、2006年)参照。
- 46) そのようなものとして、首都圏青年ユニオンの実践や新しい生き方基準を作る会著・中西新太郎監修『フツーを生きぬく進路術—17歳編』(青木書店、2005年)、S・タノック『使い捨てられる若者たち』(前掲)の職場自治の議論が参考になるろう。